

アイスランド語における 人名の愛称の音韻論と韻律論*

三村 竜之

Phonological and Prosodic Aspects of the Nickname Formation in Icelandic

Tatsuyuki MIMURA

要旨：アイスランドではお互いにファーストネームで呼び合うことが一般的であるが、親しい間柄であれば、ファーストネームを元に作った愛称 (gælunöfn) で呼び合うことも珍しくはない (例: *Gunnar* > *Gunni*)。アイスランド語における愛称はその珍しさゆえか、研究者か否かを問わず、多方面から考察や論究がなされているものの、愛称を作り出す仕組みや規則等については、いまだ不明な点が数多く残されている。本研究では、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料の分析に基づいて、アイスランド語における愛称生成の背後にあるメカニズム、特に音韻論的ないし韻律論的な側面について詳細に論じ、愛称生成にまつわる種々の規則や制約を明らかにすることを目指す。本研究の結論を概略すると次の通り: i) 愛称の「鋳型」となるテンプレート (CONS)VC^xC^x -i / -a に元々の人名の第一音節と第二音節から子音と母音を当てはめて愛称を生成する; ii) テンプレートに適合させるために、元々の人名の子音や母音、子音連結に音韻論的ないし韻律論的な操作や調整が加わることがある; iii) 語源的ないし韻律上、複合語として分析可能な人名の場合は例外的にテンプレートを利用しない場合がある; iv) 人名の第二音節に母音-óを有する場合は短縮語形成の一種である ó-orð (ó-words) に倣い愛称を作り出す; v) 上記の生成方法のどれを適用するかに関しては個人差が観察される。

キーワード： Nickname templates, consonant gemination, consonant cluster simplification, syllable weight, compound names, individual variations in rule/constraint application

1. 序

1.1. 本研究の背景と目的

アイスランド語には英語の Mr. や Mrs. に相当する敬称があり、これらをフルネームやラストネームと併用することも全くないわけではないものの、現代のアイスランドでは、例えば何かの授賞式典や大統領の演説といったようなよほど改まったあるいは格式ばった場所でない限りは、仮に初対面であっても相手の年代を問わず互いにファーストネームで呼び合うことが一般的であ

る。その一方で、ある程度親しい間柄に限定される行為ではあるかもしれないが、ファーストネームを基に作った愛称（アイスランド語で *gælunöfn*; 直訳すれば「愛着のある名前（複数形）」）で呼び合うということもよく行われる。代表的な愛称の例を以下に示す¹:

(1) a. 男性名:

- (i) *Gunnar*¹ [gún.naɾ] > *Gunni* [gún.nɪ]
- (ii) *Magnús* [mág̊.nu(:)s] > *Maggi* [mág̊.ɡɪ]

b. 女性名:

- (i) *Ingibjörg* [ín.ɡɪ.bjœrɡ̊] > *Inga* [ín.ɡa]
- (ii) *Kolbrún* [kʰól.bru(:)n] > *Kolla* [kʰól.la]

ヨーロッパにはドイツやデンマークのように人名や地名の研究が古くから根付いている国がある。これらの国々ほどではないものの、アイスランドも人名に関する研究の伝統は長く、人名そのものはもちろんのこと命名に関する法規制等を扱った論究も数多く残されている（例: Haraldur Bernharðsson (2008)）、本研究が対象とする愛称にまつわる学術的な論考も少なくはない（例: Guðmundur Finnbogason (1926), Guðrún Kvaran (2013), Willson (2006; 2007; 2008)）。

また、学術的論究と呼ぶには憚られるものの、おそらく研究者ではない一般のアイスランド語母語話者やアイスランド語に精通した非母語話者の手による考察もいくつかなされており、とりわけインターネット上にはアイスランド語における愛称の作り方をテーマ・話題とした掲示板やウェブサイトも散見される（例: *Icelandic Experiment* (2019), *Reddit* (2015)）。さらに、アイスランド語を第二言語として学習する学習者向けのサイトには、作り方に関する考察はなされていないものの、愛称の具体例が多く提示されているものもある（例: Egill et al. (2020)）。

以上から推察するに、アイスランド語における愛称の形成方法は、基本的な部分に関しては研究に携わる者のみならず、広く一般の関心を引きつけるとともに認知されていると言うことができよう。その一方で、言わずもがな、基本的な愛称形成の方法には例外も数多く確認されており、とりわけ愛称形成にまつわる音韻論的ないし韻律的な規則や制約に関しては未だ明らかとなっていない点も少なくない。本研究では、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料の分析を通じて、アイスランド語における愛称形成に関わる音韻論的・韻律的側面の解明を試みる。

1.2. 愛称研究の意義

前節にて触れたとおり、アイスランド語における愛称の形成方法に関しては、特に音韻論的・韻律的な規則や制約が未だ明らかとはなっておらず、この意味で愛称を言語学的な研究調査の対象とすることは十分に意義のあることである。それに加え、愛称形成の過程を精査することで初めて明らかとなる音韻論的・韻律論的な規則や制約もある。愛称形成は既存の人名に何らかの処理を加えることで新たな語を生み出すという点では、言うなれば言葉遊びの一種とみなすことができる。言葉遊びには、通常のフィールドワークや聞き取り調査を通じては観察することのできない様々な音韻論的・韻律論的な規則や原理が反映されていることが多く、従って、愛称形成の

¹ 以下、本稿で引用する資料は、特に断りのない限りは、全て筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料である。

メカニズムを考察することで、通常の記述研究調査では明らかにすることが困難な音韻論的ないし韻律論的諸現象やその背後にある諸原理を解明することが可能となるのである。

アイスランド語の事例に関しては本論に譲ることとして、ここでは日本語（標準語）の愛称形を例にとり音韻論における愛称研究の意義を示す：

- (2) a. サチコ>サッチャン/サチちゃん (*サちゃん)
- b. タケシ>タケちゃん (*タちゃん)
- c. タツユキ>タツちゃん (*タちゃん)
- d. ノブコ>ノブちゃん (*ノちゃん)
- e. ヨシヒコ>ヨツちゃん/ヨシちゃん (*ヨちゃん)

上記の(2)は「ちゃん」を用いて形成した愛称の例である。「ちゃん」は語形成上は派生接辞の一種として捉えることが可能である。語幹部分には元々の人名をそのまま使用し、例えば上記(2)の例で言えば「サチコ」にそのまま接辞を付加して「サチコちゃん」とすることも可能であるが、愛称が一種の新語形成と考えるならば、元々の人名を短縮した上で接辞「ちゃん」を付加する方がより好ましい。では、語幹として使用するために元々の人名は短ければ良いかというと、例えば「サチコ」の場合は「サチちゃん」や「サツちゃん」は適格である一方、「*サちゃん」は不適格であり、語幹としての長さ（あるいは短さ）に制約があることが窺える。そこで(2)に示した他の人名を用いた愛称形を精査すると、「人名は愛称形の語幹として使用する場合は1拍（1モーラ）の長さでは短すぎる」という制約が働いていることが明らかとなる。また、(2)に示した愛称として適格な例を精査することで、「語幹部分の長さは（少なくとも）2拍（2モーラ）でなくてはならない」という制約も同時に導かれる²。

以上から、日本語（標準方言）には、語形成において形態素（ひいては自立形態素である語）の長さに関して例えば Itô (1990)が唱える *minimality constraint* や窪藁(1995)の主張する「最小語条件」に相当する制約が存在することが明らかとなる。尤も、この制約は「ちゃん」を用いた愛称形の分析のみから明らかとなるのではなく、短縮語形成 (*clipping*) や混成語形成 (*blending*) からも明らかとなるものではある（例：窪藁(1995)）が、ここで留意すべき点は、日本語におけるこのような形態素の長さに関する制約は通常の語彙調査では明らかとするのが極めて困難であり、愛称形のような語形成（愛称形も短縮語形成の一種）の考察を通じて初めてその本質を明らかにすることが可能となるのである。また、「2モーラ」という長さの重要性は、リズム上の最小単位である「フット」にほぼ相当し、詩歌や標語の分析を通じてその重要性を明らかとすることは可能であるものの、通常の語彙調査ではなかなか困難である。上記の理由から、本研究では愛称の形成方法を音韻論や韻律論の側面から考察することで、通常の語彙聞き取り調査では気づきにくいアイスランド語における音韻論ないし韻律論上の制約や原理を明らかにすることも目指す。

² 尤も、語幹部分の長さ（短さ）の制約が満たされていれば常に愛称形として容認可能なわけではなく、音配列の馴染みの度合いや心地良さ等々、言語外的な要素も考慮に入れる必要があると思われる（例：トオル>?トオちゃん、ノゾミ>?ノゾちゃん、ハジメ>?ハジちゃん）。

1.3. 一次資料を採取する意義

既に第 1.1 節にて触れた通り、本論究は主として筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料に基づいている。こちらも既に第 1.1 節にて述べたことではあるが、アイスランド語の愛称にまつわる論究は質と量のいずれにおいても充実しており、とりわけ第 4.1 節にて触れる Willson (2008) は 1400 項目に及ぶ愛称に依拠した論考で、一個人の研究者が採取した資料としては極めて数が多く充実している。これだけ既存の資料が豊富にあるのならば、読者の中には敢えて一次資料の採取をせず先行研究における既存の資料をデータとして利用の方が効率が良いと考える向きもあるかもしれないが、少なくとも筆者はこのような立場は取らない。仮に先行研究による資料が既に 1 万項目以上あったとしても、筆者は自らの手による一次資料の採取はやめないであろう。ここでは筆者が考える一次資料を採取する意味について簡潔に述べる。

まず第一に、言語学が資料・データに基づいて議論や考察をおこなう経験科学であるならば、先行研究を吟味する際にはその考察結果のみならず、議論が依拠しているデータ自体の検証も不可欠なはずである。先行研究の資料には調査者の観察ミス等の誤りが全くないとは言い切れず、従って、たとえ先行研究で既に扱われている資料であっても、改めて自らの手で資料を採取・観察し直すことは必要である。また、既存のデータはあたかも全て同一の性質を有するかのよう映るが、実際の言語使用においては、使用頻度や母語話者の容認度の点で決して一様ではない。このような点からも先行研究の資料を再検討することは必要であり、またこのような再検討は母語話者をインフォーマントとする聞き取り調査を通じてのみ可能である。この他にも、実際に母語話者を通じて資料の採取を行うことで、これまで先行研究では言及されてこなかった新たな資料を入手する可能性も十分にある。最後にもう一つ指摘すべき重要な点は、フィールドワークが単に資料採取の場ではなく、データの分析を通じて抽出された規則や制約を検証する場でもある、ということである。詳細は後述するが、愛称を作り出す規則や制約が一つとは限らず、どの規則や制約も適用可能な場合もあれば、何れかの規則・制約のみが適用可能という場合もある。規則や制約自体の正当性というよりは適用範囲の問題であるが、この点も既存のデータをあたかも昆虫採集の標本のごとく観察しただけでは明らかにすることができない事柄である。調査の場面で実際に、種々の規則を適用して愛称を作り出し、インフォーマントの容認度を確認する他に最善の手段はない。

以上から、筆者は、先行研究等によって残された豊富なデータが存在するにも拘らず、敢えてフィールドワークを通じて一次資料を採取ことを重要視したい。

1.4. 「愛称」という用語について

第 1.2 節にて日本語の愛称の例を引いた際には「愛称形」という語を用いたが、他にも「愛称語」や単に「愛称」など、研究者により使用する用語にばらつきがある。本研究では、少なくともアイスランド語に関しては、筆者は「愛称」という用語を一貫して使用する。その理由は単純明快で、アイスランド語では（詳細は後述）日本語における「ちゃん」のような接辞や語尾を付加して愛称を形成するわけではなく、元々の人名を一部分を利用した語形成の一種であるからである。「ちゃん」のような派生接辞とも解することのできる形態素を付加するならば「愛称形」あ

るいは「愛称語」と呼ぶことも可能ではあるが、アイスランド語の愛称には該当しない³。また、対象言語や研究者によっては人名の愛称を「指小辞(形) diminutive」や「短縮語形成 clipping」の一種として扱う向きもあるが、(詳細は後に譲るとして) 少なくともアイスランド語に関しては愛称を形成することで音節数が増加する事例もあるため相応しくはない。以上から、本研究ではアイスランド語に関しては愛称という語を用いることとする。

2. アイスランド語の音声と音韻の概説

2.1. 音素目録

暫定的ではあるものの、現時点では次頁の(3)に示す母音音素⁴を設定することができると筆者は考えている:

- (3) /a[a~ɑ], e[e~ɛ], i, ɪ, o[o~ɔ], u, ʊ[u~ʏ], ø[ø~œ]/⁵

子音に関しては、こちらも同じく暫定的な解釈案ではあるが、(4)に示す音素を筆者は設定する(「?」を付したものは未だ完全には結論の出ていない箇所である):

- (4) /p^h, p[p~b], t^h, t[t~d], k^h, k[k~g; x~ɣ?];

f, v[v~ʋ], s, θ[θ~θ/ð?], ð[ð~ð/θ?], h;

j[j~j/ç], r[r~r̥], r̥, l[l~l̥], l̥;

m[m~m̥], m̥?, n[n~n̥], n̥, ŋ[ŋ~ŋ̊], ŋ̊?/

2.2. アクセント

アイスランド語はいわゆるストレスアクセントの言語であり、語におけるアクセント(主強勢)の位置は(5)に示す単純な規則で導くことができる(三村 2021: 80):

- (5) 品詞や音節数、語種、語構造(複合か否か、複合語であれば内部構造/枝分かれ構造)の別を問わず、左端の音節に主強勢を付与せよ。

上記の通りアクセントの位置を導く規則が一つであるという点から、そして語の長さに拘らずアクセントの位置が一箇所に固定されているという点から、アイスランド語のアクセントは「一型ストレスアクセント」と呼ぶことができる。具体例を筆者の資料から引用する(三村(2020); 各例の綴りの太字の箇所は主強勢の所在を表す):

³ アイスランド語にも接辞を付加して形成したと思しき愛称もわずかに認めらるものの(第 5.2.1 節を参照)、厳密には普通名詞や固有名詞から短縮語を形成する方法を人名に応用したものであると考えられ、従って本研究では例外的な愛称形成の方法として扱うこととする。

⁴ なお、瑣末であるとの誇りを免れないかもしれないが、(3)に示した音素は「母音音素」であり短母音音素ではない点には留意されたい。既に拙論(2024a)にて述べた通り、また本稿第 2.3 節において後述する通り、具体音声のレベルでは母音には長短の差異が確認されるものの(例: *hvít* 「白い(単数女性形/複数中性形・長母音)」 *v. hvitt* 「白い(単数中性形・短母音)」)、長短の差異は音節構造の差異から導くことが可能である。従って、アイスランド語においては音素レベルでは母音量を指定(specify)する必要はなく、(3)に示した母音音素は質でのみ区別されており量の点では短でも長でもない。

⁵ 本稿で引用する筆者の資料の音声・音韻表記には、補助記号も含めて全て国際音声字母(IPA: International Phonetic Alphabet)を使用している。

(6) a. Parts of speech

- (i) *dagur* [dái.ʏuɾ] ‘day’
- (ii) *hvítur* [kʏí.tuɾ] ‘white’
- (iii) *brenna* [brén.na] ‘burn’

b. The number of syllables

- (i) *grænn* [græ̃n̩] ‘green’
- (ii) *bolli* [bó(t)t̪l̩] ‘cup’
- (iii) *herbergi* [héɾ.bɛɾ.ɡi] ‘room’
- (iv) *pelíkani* [pʰé(:).li.k^(h)a(:).n̩] ‘pelican’

c. Loan words

- (i) *pappir* [pʰáʰp.pɪɾ] ‘paper’
- (ii) *súkkulaði* [súʰk.ku.la:ð̩] ‘chocolate’

d. Compoundings

- (i) *sjónvarpa* [sʰjón.vàɾ.pa] ‘to broadcast’
(< *sjón* [sʰjón] ‘seen, vision’ + *varpa* [vàɾ.pa] ‘throw’)
- (ii) *piparmynta* [pʰí.par.m̩n̩.ta] ‘peppermint’
(< *pipar* [pʰí.par] ‘pepper’ + *mynta* [m̩n̩.ta] ‘mint’)

2.3. 音節構造

アイスランド語は、多くのストレスアクセント言語と同様に、ある音節が強勢を担うのか否かということとその音節の（特に韻律部 *rhyme* の）構造との間に厳格な制約を認めることができる。一音節の内容語、換言すれば、語境界が後続する主強勢を担う音節⁶は、具体音声のレベルでは次の構造は認められない: *(C)V, *(C)VC（カッコ付きの記号は任意であることを示す; V は短母音を示す）。

また、強勢を担う音節は、具体音声のレベルで観察可能なものとしては以下に示す構造を有するものが挙げられる（三村 (2024a: 22)）：

(7) a. (C)VCC

例: *lest* [lést] 「隊列」, *flakk* [fláʰkk] 「放浪」 ([ʰ]は前気音 *preaspiration* を表す)

* 屈折形や派生形も視野に入れると(C)VCCC も認めうる：

dönsk 「デンマーク（人/語）の（単数女性形・中性複数形）」

b. (C)V;:, (C)V;C

例: *mý* [mí:] 「蚊（の一種）」, *flak* [flá:k] 「切り身」

なお、ここで度々、「具体音声のレベル」と述べているのは、既述の通り筆者が母音量を音韻論的に有意義な特徴とは見做さないためである。

⁶ 随分と迂言的な述べ方に感ずる向きもあるかもしれないが、正確を期するためにこのような書き方をした。というのも、少なくとも筆者のこれまでの聞き取り調査の範囲では、例えば多音節語においては、主強勢を担いながらも CVC 構造を有する音節を確認することができるからである（例: *hes.tur* 「馬」；ピリオドは音節境界を指す）。

3. 問題の所在: 先行研究の外観と問題点の整理

3.1. アイスランド語における愛称に関するこれまでの論究ならびに言及

既に触れた通り、アイスランド語における愛称にまつわる学術的な論究は数多く公にされているものの、諸般の事情から入手困難なため、筆者が未確認のものも少なくない（例えば Willson 2007）。その一方でインターネット上には、学術的と呼ぶには相応しくないものの愛称形成の方法や使用状況・条件について詳しく述べた質の高い Web サイトも散見される。そこで本節では、厳密な意味では学術的研究と呼ぶことはできない記述・考察も含めた、次の閲覧・入手の容易な先行研究や論考を取り上げる: Willson (2008)、*Icelandic Experiment* (2019)、Egill et al. (2020)、Reddit (2015)。上記の論考を批判的な視点から検討することで、アイスランドの愛称研究における問題点を明らかとすることを目指す。

3.1.1 Willson (2008). “1400 Icelandic nicknames.”

同論文は、アイスランド国立博物館の研究部署の一つである Þjóðháttadeild Þjóðminjasafns（英語名: the Folkways Division of the Icelandic National Museum）が実施した自由記述によるアンケート回答から得られた人名の愛称、約 1400 項目を基に Willson 自身がコーパスを作成し、これに基づいて種々の論究を行ったものである。愛称の由来や起源にまつわる逸話（narratives）の収集と分析に主眼を置いている。

同論文の強みは具体例の豊富さで、愛称と元の名前との間の関係性が弱いもの（例: *Mangi* < *Magnús*; 本稿の(1a)も参照のこと）が少なくないことや、元の名前と愛称の関連性が完全に恣意的なもの（例: 元の名前に拘らず女性であれば愛称が *Stella*）もあること、さらには二つ以上の愛称持つ名前（例: 元の名前が *Steinunn* で友人からは *Steina*、年配の親族からは *Steinka* という相性で呼ばれる）の存在が指摘されており、貴重な情報が数多く盛り込まれている。

一方、同論文は既述の通り愛称の由来や起源に主眼を置いているため、（当然のことではあるが）愛称形成に関わる音韻論的・韻律論的規則や制約についての言及はほとんどなされていない。

3.1.2 *Icelandic Experiment* (2019). “Icelandic Name Phenomena.”

Icelandic Experiment は首都 Reykjavík 在住のドイツ人女性の手によるインターネットサイトで、2014 年の開設以来、Reykjavík を中心にアイスランドでの生活や習慣についてブログの形式で深く扱っている。ここで取り上げる “Icelandic Name Phenomena” はアイスランド語非母語話者の視点からアイスランド語の人名にまつわる様々な側面について扱っており、その一環として愛称の特徴や作り方についても詳しく述べている。なお Aðalsteinn Hákonarson の論究に基づいているとこのことであるが、残念ながら典拠や出版年等の情報は不詳である。この点からも推察される点ではあるが、おそらく同ブログの執筆者は少なくともアイスランド語の研究者ではないと思われる。

同ブログの魅力は愛称の一般的な特徴や基本的かつ標準的な形成方法（原文では standard nickname template）について記述や考察がなされている点にある。原文は英語で記されているが、日本語で要点をまとめると次の通り: i) 通常、（仮に元の名前が一音節語であっても）愛称は二音節からなる（例: *Bjössi* < *Björn*); ii) 愛称の中には -si や -sa で終わるものもあり、この点では

diminutive に近い (例: *Jónsi* < *Jón*); iii) アイスランド人の名前の中には子供には発音しづらい長いものも多く、従って、愛称は幼児語に由来するものが多いのではないかと; iv) 典型的な人名の場合は標準的な作り方 (standard nickname template) から逸脱した愛称を持つ場合もある (例: *Sigríður* < *Sýrri*; 一般的には *Siggi*)。

このようにアイスランド語の愛称に関して有益な情報をいくつも提供してくれるものの、記述や考察の際に挙げている具体例が全体で 10 項目と著しく少ない点は残念な点である。

3.1.3. Egill et al. (2020). “Nicknames in Icelandic.” *Ylhyra*.

本節で扱う文章 (記事) は、第二言語としてのアイスランド語の学習者に向けて 2020 年に開設された Web サイトである *Ylhyra* にて公開されているものである。簡易的ではあるもののアイスランド語の自学習講座やそれに対応した語彙集、さらにはアイスランド語の発音や文法、正書法等にまつわる解説記事など多数のコンテンツが公開されており、非常に有益なサイトである。同サイトの管理と運営、並びに記事の執筆を行っている人物は次の通り (サイト上に公開されている順に示す): Egill, Anna Steinunn Ingólfssdóttir, Magnús Jochum Pálsson, Zoë Vala Sands, Angelo Deleo, Lára Molenaar。本節で扱う “Nicknames in Icelandic” は同サイトの記載情報から判断するに、Egill の手によるものである。

同記事の何よりもその強みはその具体例の項目数にあり、実に 83 項目と豊富である。さらに、項目を ‘common’ と ‘not common’ の二つのグループに分けて提示している点も、同記事の優れたとして評価することができる。また、人名によっては複数の愛称が示されており、愛称形成の方法に複数の可能性がありうることを窺い知ることができる。

一方、極めて惜しむらくは、同記事において愛称の形成方法に関する言及・記述が全くなされていないという点である。同サイトの性格や目的を踏まえると非常に残念な点である。

3.1.4. Reddit (2015). “Icelandic short names / nicknames?”

既にご存知の読者もいるかと思うが、Reddit はアメリカ合衆国のソーシャルネットワーキングサイトで、いわゆる電子掲示板 (BBS: Bulletin Board System) の機能も兼ね備えている。本節で扱う “Icelandic short names / nicknames?” は、アイスランド語の愛称を扱った独立した一つの文章を指すのではなく、ある人物が書き込んだ愛称についての問い合わせの文章に対して複数の人物が解答として書き込んだ一連の文章 (いわゆる「コメント」や「レス (ポンス)」と呼ばれているもの) の総称と捉えていただきたい。なお、ここでは BBS 等のインターネット文化の慣習に習い「スレッド」と呼ぶこととする。また、2015 年という数字は同スレッドにおける最後のコメントが書き込まれた年を指す。筆者は 2023 年 8 月 1 日に閲覧したが、現時点で同スレッドが閲覧可能か否かは不詳である点に留意されたい。また、コメントの投稿者は全て匿名であり、各人の素性、特にアイスランド語母語話者であるか否かに関しても不詳である点に注意されたい。

同スレッドの各コメントには内容の正確性や信頼性を保証する典拠や根拠も全く記されてはおらず、従って学術的な観点からの利用は本来ならば差し控えるべきではある。しかしながら、情報量という点においては、参照や入手が比較的容易な先行研究 (例: Willson 2008) に比して

も優れており、このような事情に鑑みて本稿では同スレッドの重要性を評価し、敢えて取り上げることにした。

同スレッドの最大の利点はアイスランド語の愛称の形成方法に関して実に様々な情報を得ることが可能であるという点にある。筆者の言葉で要点をまとめると次の通り: i) 元の名前の第一音節の【筆者注: 最後の?】子音を重複させて、男性であれば*-i* を女性であれば*-a* を付加して作るが例外もある; ii) 第一音節が *Þór-* である男性名の愛称は *Toggi* あるいは *Tolli* である; iii) 第一音節が *Gunn-*, *Þór-*, *Sig-* である女性名の愛称はそれぞれ *Gunna*, *Tóta*, *Sigga* である; iv) 第一音節の最後の子音【筆者: 子音字?】が *r* あるいは *ð* の場合は例外的になる可能性がある; v) 不規則あるいは形成方法の説明が困難な事例も多数ある (例: *Einar* > *Einsi*, *Jón* > *Nonni*, *Halldór* > *Dóri*, *María* > *Mæja*)。

また、同スレッドの評価すべき点としては、愛称の不明な人名もあるとの記述がなされている点である。単なる「分からない」という書き込みに過ぎないとはいえ、アイスランド語において常に愛称を作り出すことが可能であるとは限らない可能性を窺い知ることができるという意味で、極めて有益な情報であると言える。

3.2. 先行研究やこれまでの論究・言及から見える問題点

前節にて概観した先行研究や考察、論考を通じて、大まかではあるものの、アイスランド語における人名の愛称が下記の規則によって形成されると仮定することは間違い無いと思われる:

- (8) 元々の名前 (ファーストネーム) の第一音節に何らかの操作を加えたのち、男性であれば *-i* を女性であれば *-a* を付加する。

しかしながら上記の規則案には修正並びに補強を要する点が多々ある。何よりもまず必要な点は上記の規則の精密化である。例えば「何らかの操作」とした箇所であるが、既に前節にて概観した論考において触れていたような末尾子音の重複のみがありうるのか否か、他にも可能性があるのだとすればどのような操作かを明らかにする必要がある。また、第一音節には末尾子音の他に例えば母音の量や質に変化は起こらないかどうか等々、精査する必要がある。さらに、上記の規則案からは愛称が二音節語であることを読み取ることができるが、これが愛称形成において必須の条件・制約であるのか否か、種々の音節数の人名の検証を通じて検証する必要がある。これらの問題点の他にも、上の規則案に対する例外はどのような種類のものがどれほど存在するのか、また例外的な形成方法が適用される条件はどのようなものか、さらにはそもそも愛称を作り出すことのできない人名はあるのか否か、あるとすればどのようなものか検証する必要がある。

4. 資料・データ

4.1. 調査

前節にて指摘した問題点を解決すべく、母語話者一名をインフォーマントとした「調査票読み上げ形式」の聞き取り調査を実施し、人名の愛称の一次資料の採取を行った。本節ではその概要を示す。

まずインフォーマントは、これまでの筆者のアイスランド語の研究調査において協力してくだ

さっている下記の方である:

(9) Auður Guðmundsdóttir 氏⁷ (女性・1955 年生まれ)

- ・ Reykjavík 市にて生育; 9 歳から成人頃までの間は隣町の Kópavogur に居住 (2023 年並びに 2024 年の調査当時、Reykjavík から徒歩で一時間から一時間半程度の距離)。
- ・ 日本の小中学校に相当する教育機関 (grunnskóli) においてアイスランド語とデンマーク語の教鞭を執っていたため (2022 年退職)、アイスランド語の他にデンマーク語の高い運用能力を有する; その他にも筆者の把握する限りでは英語の運用能力がある。
- ・ 父君はアイスランド北西部の Ísafjörður の出身で、20 歳頃以降、現在 (調査当時) に至るまで Reykjavík 市内に居住; 御母堂は Reykjavík にて出生・生育。

聞き取り調査は Reykjavík 市 Salthamrar のインフォーマント宅にて実施した。本研究に関わる聞き取り調査の実施日は次の通り: 2013 年 8 月 26 日、2019 年 3 月 17 日・9 月 8 日、2023 年 9 月 12 日、2024 年 3 月 17 日、2024 年 9 月 8 日。全てデンマーク語を媒介言語として使用した。

既に述べた通り、調査はいわゆる「調査票読み上げ形式」で行った。筆者が予め選定した人名 149 項目 (詳細は第 4.2 節を参照) を読み上げてもらい人名自体の発音を採取し、続いてその愛称の発音を採取した。並行して、人名や愛称の発音の詳細に関する確認の質問や、愛称の有無や変異形の有無に関する確認の質問も行なった。これまでの筆者の研究調査と同様、今回の調査もインフォーマントの了承を得た上で一部始終を録音し (録音機器: Marantz 社 PMD661MKⅡ; マイクロフォン: audio-technica AT899)、併せて調査ノートの形でも記録をとった。

調査票に記載した項目の選定には先行研究等のこれまでの論考を参考にした。Egill et al. (2020) に収録されている 83 項目を基本とし、Willson (2008) や *Icelandic Experiment* (2019)、Reddit (2015) において言及のある数項目と筆者が 2013 年と 2019 年の調査で採取済みの 38 項目を追加した。さらに仮説の検証に必要と思われる人名を、アイスランド政府の機関が管理・運営する Web サイト *Island.is* 上で閲覧可能な人名のデータベース *Mannanafnaskrá* から 28 項目を選定し追加した⁸。

4.2. 採取資料・データー一覧

前節にて触れた調査票に記載した全 149 項目、並びに記載項目と先行研究等との対応 (当該項目やその愛称について先行研究等において言及があるか否か) を一覧表の形でまとめた。稿末の付表 1 を参照されたい。なお、調査票に記載した項目全てに対して愛称が確認されたわけではなく、また聞き出すことのできた愛称の中の幾つかは複数の人名に対応することもあり、従って最終的に採取された愛称は調査票の記載項目とは異なり 113 例であった (付録 2 を参照されたい)。以下、次節では筆者の採取した資料から愛称の特徴や形成方法に関して読み取ることのできる事柄を示す。

⁷ 2013 年から現在に至るまで長きに渡り筆者の研究調査に尽力して下さっている Auður Guðmundsdóttir 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる。

⁸ 同データベースは 2024 年現在、アイスランド在住者のみが使用可能のようである (アイスランド国民としての事前登録が必要のようである)。筆者は 2019 年に実施したフィールドワークの準備段階でデータベースを閲覧、電子媒体での保存を行ったため、2023 年並びに 2024 年の調査の準備の際には、予め保存してあるデータベースを参照した。

4.3. 資料・データから読み取れること

4.3.1. 音節数

採取された愛称 113 例を精査した結果、例外なく全て二音節からなることが明らかとなった（具体例は紙幅の都合上、割愛する）。

4.3.2. 第二音節の音節の開閉と母音

前節にて触れた通り、アイスランドにおける人名の愛称は二音節語である。本節では第二音節の構造（音節の開閉）と母音について明らかとなった点を述べる。まず音節が開いているか否かに関してであるが、113 例中、音節が閉じている（音節が子音で終わる）例は *Alexander* と *Alexandra* に対する愛称 *Aleks* と *Þórgrímur* に対する愛称 *Grimur* のわずかに 2 例であった。この 2 例は稿末の付録 1 において「?」を付しているところから読み取れる通り、インフォーマント自身、あまり自信のない報告であるという点を指摘するにとどめておく。

続いて愛称の第二音節の母音について。第二音節が閉音節である先述の 2 例 *Aleks* と *Grimur* に関しては母音はそれぞれ *e* [ɛ] と *u* [ʊ] である。また、僅かに 3 例であるが第二音節が母音-*ó* [Oʊ] で終わる愛称も確認されているのに加え、たった 1 例ではあるが母音-*y* [I] で終わる事例も確認されている: *Eyjólfur* に対する愛称 *Eyjó*、*Kristófer* に対する愛称 *Kristó*、*Ingólfur* に対する愛称 *Ingó*、*Stefanía* に対する愛称 *Steffy*。

愛称全体の 113 例から *Aleks* と *Grimur* の 2 例と *Eyjó*、*Kristó*、*Ingó*、*Steffy* の 4 例を除いた 106 例（約 94%）が、第二音節に母音-*i* [I] あるいは-*a* [a] (あるいは[A]) を有している。なお、第二音節に-*i*、-*a*、-*ó*、-*y* のいずれの母音が現れる例も全て当該音節は開音節である。

4.3.3. 人名の第一音節を利用するのかあるいは第二音節以降か？

本節では、愛称が元々の人名（ファーストネーム）のどの音節を基礎として形成されているかについて述べる。採取された愛称 113 例中、82 例（約 73%）が第一音節を利用して愛称が形成されている（あるいは第一音節の頭子音 onset や母音から判断してそのように推察される）。典型的な事例は次の通り: *Ásgrímur* に対する愛称 *Ási*、*Dániel* に対する愛称 *Danni*、*Magnús* に対する愛称 *Maggi*、*Sveinn* に対する愛称 *Svenni*、*Valdemar* に対する愛称 *Valdi*。

残りの 30 例の愛称のうち、11 例が第三音節（以降も含む）を利用して愛称が形成されていると推察される。該当する例の一部を以下に示す: *Elisabet* に対する愛称 *Beta*、*Magdalena* に対する愛称 *Lena*、*Nikulás* に対する愛称 *Lási*、*Sigurbjörn* に対する愛称 *Bjössi*。例えば、*Elisabet* の愛称 *Beta* は第四音節-*bet* を利用したものと考えられる。また、*Nikulás* の愛称は第一音節を利用したと考えられる *Nikki* の他に *Lási* も筆者のインフォーマントから報告があり、これは第三音節である-*lás* を利用したものと考えられる。なお、*Björn* と *Sigurbjörn* に対応する愛称 *Bjössi* のように第一音節を利用した例であると同時に、第三音節（以降）を利用した例として捉えられる愛称も僅かにあり、数の上で一部重複している点に留意されたい。

上記の 82 例と 11 例を除く全ての愛称が、第二音節を利用して形成されていると推察される。典型的な事例は次の通り: *Þórvaldur* に対する愛称 *Valdi*、*Vígfús* に対する愛称 *Fúsi*、*Vigdís* に対す

る愛称 *Dísa*。なお、例えば *Guðlaug* と *Sigurlaug* に対応する愛称 *Lauga* のように、先述の *Bjössi* と同様、数の上で重複する例が数例含まれている点には留意が必要である。

また、元々の人名のどの音節に由来するかの判断が困難な例として唯一 *Nonni* (< *Jón*⁹) が、また複数の音節に由来すると推測される例が 4 例のみ確認されている (*Sibba* (< *Sigurbjörg*), *Sibbi* (< *Sigurbjörn*), *Simmi* (< *Sigmundur*), *Sjonni* (< *Sigurjón*); 第一音節の一部 *Si*-と第三音節の頭子音 *b* や *m* を利用か? *Sjonni* に関しては不詳)。

4.3.4. 愛称の第一音節の構造

元々の人名のどの音節を基本として形成されたかに拘らず、ほとんどの愛称は第一音節に音節量や構造の点で共通性や一般的な傾向性を有していることがわかる。筆者の資料の中では、愛称全体が「(C)VC^xC^x-i/-a」(C^xC^xは同一子音の連結、つまり重子音連結を指す)あるいは「(C)VC^xC^y-i/-a」(C^xC^yは異なる子音の連結)という構造で第一音節が短母音を有する重音節 ((C)VC) である事例が最も多く、全体で 73 例 (約 65%) 確認されている。なお、既に第 4.3.2 節にて示した通り、母音-ó や-y で終わる愛称がわずかに確認されているものの、全体で「(C)VC^xC^y-ó/y」という構造を持つためここに含めて扱っている。代表例を以下に示す: *Benedikt* に対する愛称 *Benni*、*Gunnar* に対する愛称 *Gunni*。

ちなみに、「(C)VC^xC^x-i/-a」の構造を有する愛称は元々の人名の第一音節を利用したと思しき事例に多く観察され、第一音節を利用したと推定される 82 例 (第 4.3.3 節参照) のうち 61 例 (約 74%) が該当する。

次に多く確認された事例は、愛称全体が「CVV(C)-i/-a」という構造で第一音節が長母音ないし二重母音を持つ重音節 ((C)VV; 便宜上 VV で長母音と二重母音を表す) の場合で、26 例確認されている: *Ásgrímur* に対する愛称 *Ási*、*Halldór* に対する愛称 *Dóri*、*Jóhanna* に対する愛称 *Jóa*、*Ólafur* に対する愛称 *Óli* など。なお、「CVV(C)-i/-a」という構造を有する愛称は元々の人名の第二音節以降を利用した場合に多く見られ、26 例中 23 例 (約 88%) がこれに該当する。

また、例えば *Eiríkur* に対する愛称 *Eiki* のように基本とする音節が複数に渡ると思しき事例も数例確認されているが、愛称の第一音節の音節量は重音節である: *Guðjón* に対する愛称 *Gau(j)i*、*Friðrik* に対する愛称 *Frikki* など。

ちなみに愛称の第一音節が VVC という構造の超重音節である事例も確認されているが、*Jón* に対する愛称 *Jónði* と *Jónsi*、また *Einar* に対する愛称 *Einsi* の 3 例のみである。

4.3.5. 愛称の変種と個人差の存在

先行研究等のこれまでの論考においても度々指摘されてはいるが、筆者の資料からも、人名によっては複数の愛称があり得ることが明らかとなった: *Guðmundur* に対しては *Gummi* と *Mummi* と *Mundi*、*Jón* に対しては *Nonni* と *Jónsi* と *Jónði* など。ここで特筆すべきは、例えば筆者の資料では *Jón* に対しては *Nonni*、*Jónsi*、*Jónði* の三つの愛称が確認されている一方で、先行研究等のこれ

⁹ 査読者より、*Jón* の -on と愛称の *Nonni* の (第一音節の) -on の共通性について指摘があった。現段階では指摘の妥当性や正当性について明確な見解を筆者は持ち合わせていない。今後の課題としたい。

までの論考では *Nonni* と *Jónsi* のみが報告されており、筆者がインフォーマントから聞き出すことのできた *Jónði* は報告されていないという点である。ここから、同じ人名であっても想定され得る愛称には個人差のようなものがあり得るということが読み取れる。なお、このように複数の愛称が許容される事例は、筆者の資料では 23 例確認されている。

また、この他にも、先行研究等で報告されている愛称と筆者がインフォーマントから聞き出した愛称が一致しないという意味での個人差も 10 例確認された。その一部を以下に示す: *Freysteinn* に対する *Steini* (先行研究等では *Freysi*)、*Guðrún* に対する *Gunna* と *Rúna* (先行研究等では *Gugga*)、*Kristófer* に対する *Kristó* (先行研究等では *Krissi*)。

次節(第5節)では第4節にて示した資料をいかに解釈すべきか考察を行い、アイスランド語における愛称の形成方法について詳しく論じていく。

5. 考察

5.1. 愛称の生成規則ならびに制約

5.1.1 愛称のテンプレート

第5節ではアイスランド語における愛称生成のメカニズムやその背後にある原理の解明を試みるが、まず出発点として、筆者は(10)に示すようなテンプレート(プロトタイプないしデフォルト的な鋳型)を仮定する:

$$(10) \quad (C_{ONS})VC^xC^x-i/-a$$

(V と C^x はそれぞれ元々の人名の第一音節と第二音節に由来¹⁰)

上記のテンプレートに関して若干の補足説明を行う。まず全体で二音節から成り、第一音節の頭子音 onset (C_{ONS} で示す) は任意で、あるとすれば 1 つである。第一音節の母音は短母音で、後続する末尾子音 coda は第二音節の頭子音と同一である(つまり、母音間で重子音連結をなす)。第二音節は開音節で、母音は男性の愛称であれば /ɪ/、女性であれば /a/ である。

このようなプロトタイプないしデフォルト的な構造を愛称に認める根拠は次の二つである。まず第一に、第 4.3.1 節、第 4.3.2 節、第 4.3.4 節にて触れた統計的数値に基づいている。既に見た通り、筆者の資料では全ての愛称が二音節語であり、その約 95% で第二音節が母音 /ɪ/ [ɪ] あるいは /a/ [a/a] で終わっている(つまりは開音節である)のに加え、約 74% で第一音節の母音が短母音で末尾子音が第二音節の頭子音と同一(つまり重子音連結)である。第二の論拠としては、上記のテンプレートと同一の、あるいは酷似した構造を予め有する人名の場合は、インフォーマントの内省観察では愛称がないという事実である: 例えば *Anna*、*Erla*、*Inga* など。*Anna* を例にとると、第一音節の頭子音が無く母音は短母音であり、音節間の子音連結は -nn- と重子音で、かつ第二音節は母音 -a で終わっている。つまりは、*Anna* という人名それ自体が(10)に示したテンプレートを成しており、愛称の作りようがないのである。また、*Inga* の場合は音節間の子音連結が重子音でないという点ではテンプレートと厳密に一致はしていないものの、第一音節は頭子音を欠き且つ短母音を有しており、また第二音節は母音 -a で終わる開音節であるという点で、著しくテ

¹⁰ テンプレート内の V と C^x の指定(由来)に関する記述は査読者の助言に基づき追加した。

ンプレートに類似した構造を持っている。従って、*Inga* の場合もいざ愛称を生成しようと試みても、あまりにもテンプレートに酷似しすぎているため、愛称を作り出すことができないのである。

先述の *Anna* などの例に関してさらに特筆すべきは、稿末の付録 1 にて右端に付した「÷」の記号（マイナスの意）からも読み取れる通り、先行研究等のこれまでの論究においても愛称は報告がなされておらず、この点からも(10)に示したテンプレートの蓋然性が裏付けられる。

さて、ここまでアイスランド語における愛称のデフォルト的な型と言えるテンプレートについて述べてきたが、このテンプレートのみで全ての愛称が作り出されているとは筆者は考えてはいない。もし母語話者がある人名から愛称を作り出そうと試み、元々の人名の第一音節を基本とした場合はこのテンプレートを利用すると筆者は考える。その根拠は第 4.3.4 節にて示した統計的数値で、元々の人名の第一音節を利用したと思しき愛称の約 74%がテンプレートと同一ないし酷似した構造を有しているからである。しかし、第二音節以降を利用した愛称はそもそもテンプレートに基づいて生成されたものではなく、異なる原理（規則・制約）に基づいていると筆者は考える。また、既述の通り第二音節以降を利用した愛称は「CVV(C)-i/-a」という構造を有する傾向が強いが、筆者はこの構造をテンプレートとは想定していない（詳細は第 5.2.3.節を参照）。

5.1.2. なぜテンプレートは全体で二音節なのか？

前節の(10)にて「(C_{ONS})VC^xC^x -i / -a」という二音節からなる構造をテンプレートとして提唱したが、そもそもなぜ二音節から成るのか。この疑問は、アイスランド語のリズムの構造や特性を考慮に入ると、容易に説明が可能である。既に第 2.2 節において触れた通り、アイスランド語は「一型ストレスアクセント」の言語であり、語の第一音節（左端の音節）に物理音響学的ないし聴覚的な卓立が置かれる。三音節以上からなる語（多くは外来語や複合語・派生語）や句、文といった多音節構造におけるリズムも同種の卓立の有無によって生み出され、アイスランド語では卓立により生じるリズムの拍が基本的には左から数えて奇数番目の音節に置かれる(Dehé and Wetterlin 2013: 229; Kristján Árnason 2005: 1564; 三村 2015)。つまり、アイスランド語においては「強弱」という二音節の連続がリズム上の最小のまとまりとして好ましく、例えば「強弱弱」といった卓立を一つのみ有する奇数個の音節の連続は好ましくないと考えられる。同様の理由から、逆に「強」のみの一音節もリズム上は回避されやすい。

愛称を作り出すことが広義の言葉遊びの一種であると捉えるならば、愛称生成の際にリズムが重要視されることは極めて自然なことであり、また（必須の条件・目的ではないものの）愛称生成が短縮語形成としての性格も有することを踏まえると、リズムの上で好ましく且つ最短の構造として二音節の連続が選択されることは至極自然なことと言える¹¹。

¹¹ 例えば *Njáll* のような一音節語の人名から愛称 *Njalli* を生成することは、本文にて述べたリズムの観点から考えれば至極自然なことであると言える。その一方で、例えば同じく一音節語の人名である *Björk* や *Dór* は筆者のインフォーマントの報告では愛称がない。インフォーマントの説明は「短すぎる名前のため愛称を作ることができない」というものであるが、上記のリズムの観点から言えば愛称を作ることは不可能ではないと思われる。愛称生成の可否という点で一音節語の人名に差異があるのか否か、あるとすればどのような性質・特徴が関係しているのか、現時点では不明である。今後の課題としたい（第 6.2.2.節も参照）。

5.1.3. 第二音節がなぜ*-i*あるいは*-a*なのか？

続いて本節では、愛称（ないしはテンプレート）の第二音節がなぜ母音*-i*あるいは*-a*で終わっているのかについて若干の補足を行う。というのも、アイスランド語やゲルマン語歴史・比較言語学に明るくない読者にとっては説明が必要であると思われるからである。

アイスランド語の名詞には「性（文法性 *gender*）」の範疇があり、男性・女性・中性の三種類を区別する。また名詞は主格・対格・与格・属格の四つの語形をとる（尤も、語によっては異なる格でありながら同型となる場合があるが）。ゲルマン語歴史・比較言語学の慣習に倣い格変化の面から名詞を「弱変化名詞」と「強変化名詞」に大別することが一般的で、現代語に照らし合わせて解すれば、主として個々の格語尾が母音で終わるのが弱変化名詞である。弱変化名詞の基本形（単数主格不定形）は男性の場合は語尾*-i*で、女性の場合は*-a*で示される。必ずしも完全に一致する分類ではないものの、概して捉えれば弱変化名詞は規則的な格変化を示す名詞であり、数の点から言えば強変化名詞よりも多いと考えて差し支えない。従って、母音*-i*と*-a*はそれぞれアイスランド語において男性名詞と女性名詞を表す典型的な語末母音と考えることができる。そのため、愛称を形成するテンプレートにおいても、第二音節が母音*-i*と*-a*のいずれかを有する開音節構造であると考えられるのである。

5.1.4. テンプレートに適合させるための音韻的ないし韻律的操作

前節にて「(C_{ONS})VC^xC^x-i/-a」というテンプレートを愛称のプロトタイプ的な構造として仮定した。実際の愛称生成においては、テンプレートのいわば「空き間」を元々の人名の第一音節と第二音節の子音や母音を利用して埋めていくわけだが、既存の子音や母音がそのまま使われるとは限らず、場合によっては空間に適合させるために子音連結の簡略化や母音量の減少といった音韻的ないし韻律的な操作が必要となる。

まずテンプレートの C_{ONS} にあたる第一音節の頭子音について見ていく。元々の人名の第一音節の頭子音が子音連結でない場合は特に操作を加えることなく C_{ONS} にのままだてはめるが、子音連結の場合は簡略化を経たと思しき事例がわずかに観察された: *Brynjólfur* に対する愛称 *Binni*、*Kristinn* に対する愛称 *Kiddi*、*Kristjana* に対する愛称 *Kidda* など。なお、同じく子音連結 *Br-*を有する *Bragi* は愛称の報告がなく、*Kristó* は後述（第 5.2.1 節）の通りテンプレートを利用せずに愛称を生成している。

テンプレートを利用して愛称を生成したと思われる事例で元々の人名の第一音節の頭子音が子音連結であるものは、*Kj-*が 1 例、*Bj-*が 3 例、*Fr-*が 2 例、*St-*が 3 例、*Sv-*が 2 例確認されており、全て愛称においても C_{ONS} にそのまま子音連結が使用されている。現時点での筆者の資料では頭子音連結の簡略化が生じた事例は(24)の 3 例のみであるため（また *Kristinn* と *Kristjana* に関しては果たしてテンプレートを利用して愛称が生成されているか断定し難いため）、納得のいく考察を行うことが甚だ困難である。しかし、少なくとも数字の上では、テンプレートを利用した愛称生成の場合は元々の人名の第一音節の頭子音連結は簡略化せずそのまま保持する、と結論づけられよう（なお *Hreinn* などの頭子音 *Hr-*は子音連結ではない点に留意されたい）。

続いてテンプレートの V に相当する元々の人名の第一音節の母音について考察する。V は文

字通り短母音であるため、元々の人名の第一音節が長母音ないし二重母音である場合は、母音量（音節量）の減少・短縮という操作が期待される。事実、下記の具体例が示す通り基本的には元々の人名の第一音節の母音量は減少・短縮している：*Rikharður* に対する愛称 *Rikki*、*Sveinn* に対する愛称 *Svenni*、*Tómas* に対する愛称 *Tommi*、*Víglundur* に対する愛称 *Viggi* など。

一方、既に第 4.3.4 節において示した通り、*Jón* に対する愛称 *Jónði* と *Jónsi*、また *Einar* に対応する *Einsi* の 3 例のみではあるが、母音量の減少・短縮がなされず、結果として愛称の第一音節が VVC という構造の超重音節である事例も確認されている。僅か 3 例のみからでは十分な考察を行うことは難しく今後の調査を俟つこととなるが、現時点では数字の上から判断して、原則的には元々の人名の第一音節の母音量はテンプレートに適合させるべく減少ないし短縮される、と考えて差し支えないだろう。

なお、以下に示す通り、上記の 3 例の他にも元々の人名の第一音節の母音量が保持される事例が複数例確認されている：*Ásgrímur* に対する愛称 *Ási*、*Eyjólfur* に対する愛称 *Eyjó*、*Jóhanna* に対する愛称 *Jóa*、*Ólafur* に対する愛称 *Óli*、*Pétur* に対する愛称 *Pési*、*Steinunn* に対する愛称 *Steina* など。これらの愛称は、テンプレートの重子音連結(C^xC^x)に相当する箇所にも単一の子音が現れており、従って母音量の点でも子音連結の点でもテンプレートに合致しない反例と解することができるが、第一音節の音節量が重音節という点ではテンプレートに適合しており、この点で母音量の減少や短縮が回避されて愛称の生成がなされていると考えられる。

最後にテンプレートの C^xC^x の箇所にも相当する重子音連結について考察する。様々な事例が確認されておりなかなか一筋縄では行かず、明確な規則や制約を導くことは困難であるが、アイスランド語の子音に関して通常の語彙調査では観察することのできない興味深い振る舞いや子音連結簡略化の傾向性を指摘することは可能である。本稿では具体的事例の提示と傾向性の指摘にとどめることとする。

まず、元々の人名の第一音節と第二音節の間（interlude）に重子音連結がそもそも備わっている場合は、愛称生成の際にも保持される：*Finnbogi* に対する愛称 *Finni*、*Matthías* に対する愛称 *Matti* など。しかしながら *Sverrir* に対する愛称 *Sveppi* のような反例も確認されている（アイスランド語において *r* で示される音は基本的には歯茎ふるえ音であるが、愛称形成においては回避される傾向にある；後述の子音連結に関する考察も参照）。なお、*Njáll* や *Páll* は綴りを見る限りでは重子音連結-ll が保持されているように見えるが、実際の音声・音韻の面では子音連結（無声歯茎側面破擦音）の簡略化を得た後の（側面接近音の）重子音化である点に留意されたい¹²。

続いて、元々の人名の第一音節と第二音節の間が単一の子音である場合は、その子音を重子音化する：*Benedikt* に対する愛称 *Benni*、*Sigurður* に対する愛称 *Siggi*、*Tómas* に対する愛称 *Tommi* など。しかしながら摩擦音の場合は他の子音への置き換えや脱落が見られる：*David* に対する愛称 *Dabbi*、*Stefán* に対する愛称 *Stebbi*、*Auður* に対する愛称 *Auja*、*Guðjón* に対する愛称 *Gau(j)i*、*Jóhanna* に対する愛称 *Jóa* など。上の例から読み取れる通り、唇歯摩擦音 *f* と *v* はいずれも破裂音 *b* に置

¹² *Njáll* などに見られるこのような子音連結の簡略化と重子音化は、アイスランド語における無声歯茎側面破擦音がそれ自体で自律した音素ではなく、音素結合（無声無気歯茎閉鎖音と側面接近音）であるという解釈を裏付けるものと考えられる（拙論 2024b）。

き換えられて重子音化しており、また歯(間)摩擦音 δ は硬口蓋接近音 j へ置き換えがなされ、声門摩擦音 h は脱落している。 h がとりわけ母音間で脱しやすことは通言語的に見ても説明が可能であるが、その他の事例については説明が難しい。 f と v が調音点を共有する b に置き換えることはある程度は理解できるものの、なぜ破裂音に置き換わっているのだろうか？ 一種の異化現象(dissimilation)と解することも可能であろうが、そもそも摩擦音で重子音連結を生み出すことが物理音響学的ないし空気力学的に困難であるかどうか説明することは難しい。

さらに、元々の人名の第一音節末尾あるいは第一音節と第二音節の間に（重子音ではない）子音連結がある場合は、*Valdemar* に対する愛称 *Valdi* のように元々の子音連結が保持される事例もあるものの、ほとんどの場合、子音連結の簡略化や置き換えがなされる。まず、先述の f の事例と同様、 f を含む子音連結は別の子音からなる重子音連結に置き換えられる：*Hrafnhildur* に対する愛称 *Hrabba*、*Hafsteinn* に対する愛称 *Hatti* など。また先述の *Auður* の事例と同様、歯(間)摩擦音 δ は子音連結においても回避される傾向にある：*Friðrik* に対する愛称 *Frikki*。詳細な議論はさらなる調査を俟たざるを得ないが、アイスランド語の愛称形成においては摩擦音は総じて回避される傾向が強いと言ってよいかもしれない（なお、*Ásgrímur* に対する愛称 *Ási* のような例も存在するが、これは第 5.2.3 節にて述べる複合語としての分析が働いた結果、インフォーマントが *-sgr-* を子音連結とは判断しなかった可能性がある）。

こちら先述の *Sverrir* の愛称 *Sveppi* で既に触れたが、 r は子音連結においても回避される傾向が強く、筆者の資料では子音連結の最初に r が現れる場合、換言すれば *rr* という重子音連結の生成が期待される場合、例えば *rl* や *rg* はそれぞれ *ll* と *gg* に置き換えられている：*Erlingur* に対する愛称 *Ellli*、*Margrét* に対する愛称 *Maggi* など。しかし *Kjartan* に対する愛称 *Kjarri* のような例もあり、一筋縄では行かない。また *Björn* に対する愛称 *Bjössi* のように元々の子音連結を構成する子音とは別の子音からなる重子音連結に置き換わる事例もある¹³。

5.2. 規則ならびに制約に反する事例

5.2.1 第二音節が母音-*ó* で終わる愛称

第 5.1 節では愛称の基盤となるテンプレートを提唱し、人名をテンプレートに適合させるための種々の音韻的なないし韻律的な操作の考察を通じて、愛称生成の規則ならびに制約を明らかにした。しかし、既に第 4.2 節と第 4.3 節にて示した具体例から明らかであるが、愛称生成の規則や制約に反する事例も決して少なくはない。そこでまず本節では、反例の一つとして第二音節が母音-*ó* で終わる愛称を取り上げて、その性質について考察する。

第二音節が母音-*ó* で終わる開音節構造である愛称は、既に第 4.3.2 節で示した *Eyjó* (< *Eyjófur*), *Ingó* (< *Ingófur*), *Kristó* (< *Kristófer*) の僅かに三例のみである。資料の数が極めて限られはいるが、その範囲内でこれらの愛称が生み出されたと思しき条件や要因について推察したい。まず最初に指摘すべき点は、*Eyjó*, *Ingó*, *Kristó* のいずれも元となる人名の第一音節を基本としており、また構造的にもテンプレートに準じており、この意味では全くもって規則や制約に反する事例ではな

¹³ *Bjössi* の *-si* は類例が *Einar* に対する愛称 *Einsi* や *Jón* に対する愛称 *Jónsi* にも観察されるため、おそらく指小辞の一種として捉えるのが妥当かもしれない。

いという点である。規則や制約に反しているのは第二音節に現れている母音-*ó*なのである。

では、なぜ *Eyjó*, *Ingó*, *Kristó* の三つはテンプレートに予め備わっている母音-*i* や-*a* ではなく-*ó* が第二音節に現れているのか。この問いの答えは、アイスランド語で *ó-orð* (英語: *ó-words*) と呼ばれる-*ó* で終わる短縮語が大きく関与していると筆者は考える。紙幅の都合上、詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、アイスランド語では語尾-*ó* を使って短縮語を作り出す一種のスラング的な言葉遊びがあり (例: *Kefló* < *Keflavík* 「ケプラヴィーク空港 (レイキャヴィークの国際空港)」, *sígó* < *sigaretta* 「タバコ」; cf. Jones 1964)、この場合も、母音-*ó* を含めた短縮語全体が二音節語になることが重要な条件である。

人名から愛称を作るという行為もいわば一種の言葉遊びに通ずる性格を持つと考えるならば、元々の人名の第二音節に予め-*ó* がある場合は、愛称生成の際にテンプレートに合わせて大まかな音節構造は組み立てながらも敢えて第二音節の母音は-*i* と-*a* のいずれをも選択はせず、元々の人名の第二音節に備わっている-*ó* をそのまま利用することで *ó-orð* に倣う形をとったのではないだろうか¹⁴。

5.2.2 第二音節が母音-*y* で終わる愛称

第 4.3.2.節にて触れた通り、第二音節が-*i* か-*a* のいずれでも終わらない例外としては前節で考察した-*ó* で終わる愛称の他にもう一種類、-*y* で終わるものがある。如何せん、筆者の資料では *Stefanía* に対する愛称 *Steffy* 一例のみが確認されているため、十分な考察を行うことは困難であると思われるが、インフォーマントから得られた内省報告を元にどのような性質の例外であるかを考察することは十分に意義のあることであろう。

インフォーマントからの報告に関して注目すべきは次の 3 点である: i) *Stefanía* の愛称は *Steffy* の他に *Stebba* もある; ii) *Steffy* の方が *Stebba* よりも新しい; iii) **Steffa* という愛称はない。確かに男性名 *Stefán* に対する愛称 *Stebbi* において *f* が *b* に置き換えられている点や、テンプレートに適合してはいるものの *b* に置き換えず *f* のまま生成した愛称 **Steffa* が不適格であるという点に鑑みて、元々の人名の *f* が保持されている *Steffy* は「新しさ」を醸し出していると言えるだろうが、何にもまして新しさを生み出しているのは第二音節の母音-*y* であろう。この-*y* が何に由来しているかは *Steffy* 一例のみからでは確証は得られないが、筆者が推察するに広くヨーロッパに見られる人名や愛称である *Steffi* や *Steffie*, *Stephie* 等に倣ったものではないだろうか。特に *Steffi* 等の既

¹⁴ *Ísólfr* や *Halldór*, *Halldóra*, *Runólfur* のように、本文において提案した仮説に合致するにも拘らず母音-*ó* で終わる愛称が確認されていない事例もある。母音-*ó* で終わる愛称も生成しうるか否かに関しては今後の調査に譲らざるを得ない (第 6.2.3 節も参照)。

また査読者から、筆者の言及した *ó-orð* が英語における *catto* (< *cat*), *doggo* (< *dog*), *puppo* (< *pup*) 等の一種のスラングの影響を (特にインターネットを経由して) 受けたものではないかとの指摘があった。管見に及ぶ範囲では、アイスランド語における *ó-orð* の存在は既に 1927 年には指摘がある (例: Alexander Jóhannesson 1927; cf. Jones 1964: 25) ためインターネットの影響は考え難いが、英語における *o-words* の例は 1883 年には確認されていたとの報告もあるため (Parkvall 1998)、査読者の指摘する英語の影響を立ち所に否定するには至らない。*ó-orð* や *o-words* に類する現象はスウェーデン語やフィンランド語、ドイツ語、オランダ語などにも観察されることが報告されている (Parkvall 1998)。偶然である可能性は否定できないが、引用されている言語がおしなべてストレスアクセントの言語であることを踏まえると、アクセントのタイプとの相関関係や、これらの諸言語における *o-words* の起源がどの言語に由来するのかなど、著しく興味深い問題を提起する。今後の課題としたい。

存の人名や愛称は既に *ff* という（綴りの上ではあるものの）重子音連結を有しており、この点が愛称形成のテンプレートに適合しているがためにすんなりとアイスランド語の愛称として利用することができたのかもしれない。

5.2.3 第一音節を利用しない愛称: 複合語由来の人名あるいは複合語に類する人名

既にここまで見てきた通り、元々の人名の第一音節を明らかに利用して作られたと考えられる愛称が基本であり、従って、その他の愛称を「元々の人名の第二音節あるいは第三音節を利用して作った愛称」としてこれまで便宜的に扱ってきた。しかし実はこれらの人名は語源的に複合語に由来するものがほとんどである。具体例をいくつか示す: *Guðmundur* や *Hildimundur* に対する愛称 *Mundi*、*Kristleifur* や *Sigurleifur* に対する愛称 *Leifi*。例えば *Mundi* は対応する *Guðmundur* の場合は第二音節を、また *Hildimundur* の場合は第三音節を利用して作られているように表面的には見えるが、いずれも *-mundur* 利用して愛称が作られていると考えると共通性が見えてくる。その共通性こそが人名の内部における複合的な語構造、端的に言えば語内部の「切れ目」の存在である。同種の切れ目は *Leifi* に対応する *Kristleifur* と *Sigurleifur* にも該当し、*-leifur* の直前に切れ目があると考えられる。

筆者が推察するに、おそらくアイスランド語母語話者であれば上記の人名が語源的に複合語であることを容易に感じ取ることができると思われる。というのも、これらの人名におけるいわば複合語の前部要素に相当する部分である *guð-*, *hildi-*, *kristi-*, *sigur-* は、それぞれ *guð* 「神」、*hildur* 「戦い」、*Kristur* 「キリスト」、*sigur* 「勝利」という自立語として存在するためである。

なお、注意すべきは、ここでいう「切れ目」はあくまでも母語話者の意識として捉えられる種類のものであり、従って形態論でいうところの形態素境界とは全くもって異質のものであるという点である。この点は次に示す外来語由来（と推察される）の人名の愛称からも読み取ることができよう: *Magdalena* に対する愛称 *Lena*、*Nikulás* に対する愛称 *Lási* など。上記の人名はいずれも、少なくともアイスランド語母語話者の感覚としては語源的な意味での切れ目は存在しないと思われる。にも拘らず、全て第一音節以外の音節を利用して愛称を作り出しているのはなぜか。この問いの答えには元々の人名の長さ（音節数）が関与していると筆者は考える。アイスランド語の語彙の中でゲルマン祖語やノルド（北ゲルマン）祖語に由来すると推定される語は一音節語ないしは二音節語であり、従って三音節以上の長さを持つ語はアイスランド語母語話者には長い語と認識されると思われる。このような長い語の場合、既に第 5.1.4 節にて触れたリズムの構造上から（主強勢を担う音節以外では）奇数番目の音節に卓立が置かれ、これがあたかも複合語後部要素が担う副次強勢の如き役割を果たすために、母語話者にとってはまるでこれら三音節以上からなる人名が二つの要素から成り立っているかのような印象を韻律的に抱くのではないだろうか。このように仮定すれば、*Magdalena* や *Nikulás* の愛称がなぜ第三音節を利用した *Lena* や *Lási* であるのが容易に説明可能となる。

さて、第一音節以外の音節を利用した愛称は「CVV(C)-i/-a」（VV は二重母音も含む）という構造を有するものが多いことは第 4.3.4 節にて既に指摘した通りだが、筆者はこの「CVV(C)-i/-a」という構造をテンプレートとは見なしていない。というのも、第一音節以外の音節を利用した愛

称は、換言すれば元々の人名の内部に語源的ないし韻律上の「切れ目」の存在する場合であり、その切れ目に後続する言わば「後部要素」を利用して生成したものである。事実、次の例からも明らかな通り、基本的には後部要素の第一音節がそのまま利用されている: *Bergmann* に対する愛称 *Manni*、*Friðleifur* に対する愛称 *Leivi*、*Jóhanna* に対する愛称 *Hanna*、*Guðmundur* に対する愛称 *Mummi* と *Mundi*、*Vigdís* に対する愛称 *Dísa* など。ここでいう「後部要素」を利用したと推察される愛称は後述する *Keli* (<*Hrafnkell*)と *Steini* (<*Bergsteinn*)を除き、全て後部要素の第一音節をそのまま利用している。愛称の第一音節において短母音を有する事例は、元々の人名の後部要素において元来、短母音を有しているもので母音量の減少や短縮のような操作を経たわけではない (例: *Hanna* < *Jóhanna*, *Mundi* < *Guðmundur*)。また、愛称の第一音節に長母音や二重母音を持つものも、そもそも人名の後部要素の段階で長母音や二重母音を有していたのであり、鋳型として「CVV(C)-i/-a」という構造に適合させたわけではないことが読み取れる (例: *Dísa* < *Vigdís*, *Leivi* < *Friðleifur*)。

さて、先述の *Hrafnkell* に対する愛称 *Keli* と *Bergsteinn* に対する愛称 *Steini* の場合であるが、この2例のみでは推察の域は脱し得ないが、おそらく後部要素として分析可能であるである *-kell* と *-steinn* をそれ自体で独立した人名とし捉え (事実、*Steinn* はそれ自体で人名として存在する)、その結果、*-kell* と *-steinn* をテンプレートに当てはめたのではないだろうか (なお、同様の解釈は後部要素に *-björn* を持つ人名の愛称 *Bjössi* を説明する上でも有効でもあることから、その妥当性は保証されるだろう)。¹⁵

5.3. 話者間での愛称の差異や複数の愛称が存在する理由

既に第 4.3.5 節にて触れた通り、ある話者では愛称の報告があるものの別の話者では愛称の存在が認められない場合や、愛称の存在を認めるという点では共通するものの話者間で報告される愛称が異なるといった場合もある。このような話者間での個人差や愛称の変種の存在自体に関しては、実は説明は容易である。というのも、第 5.2 節では形式上はテンプレートを使用した相性形成の方法に対する反例について論じたが、実質的には愛称形成にまつわる規則が複数存在するということを実を明らかにしたのであり、話者間でどの規則を採用・適用するかが異なれば、自ずと報告される愛称に個人差が生じるからである。特に第 5.2.3 節において論じた複合語由来の人名ないし複合語に準ずる内部構造を有する推定される人名に関しては、話者自身の語源意識も大きく関与するため個人差が顕在化しやすいと言える¹⁶。

¹⁵ 複合語由来ないし複合語に準ずる推定する人名の場合、後部要素を利用して愛称が生成される傾向にあるとの筆者の主張に対して、査読者から幼児の言語習得との関連が指摘された。幼児にとっては短い音形の方が容易に発音可能で、かつ元々の語の後半部分という記憶に残りやすい箇所を利用した結果ではないかとの主張である。3.1.2 節にて言及した「愛称が幼児語に由来」という記述も含めて、今後の考察課題としたい。

¹⁶ 確かに、愛称形成において個人差が生ずる仕組み自体の説明は本文で述べた通り容易ではあるものの、個人差を生じさせる契機がなんであるか、換言すれば話者間で採用ならびに適用する規則が異なる事情やその背景がいかなるものであるか、この点を明らかにしない限りは完全に論証したことにはならない。紙幅の都合上、稿を改めざるを得ないが、解決すべき課題である。

6. 結語

6.1. まとめ

以上、本稿ではアイスランド語における人名の愛称の生成方法に関して特に音韻論ならびに韻律論的な側面から考察してきた。本研究の要点をまとめると次の通り：

- (11) a. アイスランド語の人名の愛称は基本的に次のテンプレートを基にして生成される：
(C_{ONS})VC^xC^x -i / -a (V と C^x はそれぞれ元々の人名の第一音節と第二音節に由来)
- b. 元となる人名の第一音節の母音と子音、並びに第二音節の頭子音を利用してテンプレートから愛称を生成する。
- c. テンプレートに適合させる際には、第一音節の母音や子音、第二音節の頭子音は、母音量の減少・短縮や子音連結の簡略化、子音の代替といった音韻論的なならびに韻律論的な操作がなされるのが一般的である。
- d. 元々の人名の第二音節に母音-ó を有する場合は、子音や母音からなる大まかな骨組みや音節構造などはテンプレートに合わせながらも、末尾の母音は-i/-a ではなくで終わらせる；短縮語形成の一種である ó-orð に倣った方法である。
- e. 元々の人名が語源的あるいは韻律的に複合的であると話者が判断した場合は、「後部要素」に相当する部分を利用して愛称を生成する。
- f. 上記の愛称生成の方法は、その選択と適用に個人差が見られ、その結果、同一の人名であっても報告される愛称に個人差が生じる。

6.2. 今後の課題

6.2.1. テンプレートを利用した愛称生成における子音連結について

すでに第 5.1.4.節にて詳述した通り、元々の人名の第一音節末尾あるいは第一音節と第二音節の間の子音(連結)に操作を加えてテンプレートに適合させる場合が多いが、操作の方法を単純な規則や制約で一般化することは著しく困難である。更なる調査を通じて豊富に具体例を採取する必要があることは言うに及ばず、仮に資料から何らかの一般化が可能であるとしても、一般化の背景にある仕組みを音声学的に説明することが可能であるか否か、慎重な考察が必要である。

6.2.2. 一音節からなる人名の愛称生成の可否について

既に脚注 9 にて触れたが、一音節からなる人名に関しては、愛称を生み出すことが可能か否かの点でインフォーマントの報告に差異があり、ある人名は愛称の報告がある一方で、別の愛称では「短いため」という理由から愛称が存在しないとの報告がある。確かに「短いため」という音節数に基づく理由づけは、愛称が短縮語形成の一種としての性格も有する点を考慮すれば理にかなっているように思えるものの、*Björn* や *Karl*、*Jón*、*Njáll*、*Sveinn* のように *Bjössi* や *Kalli*、*Jónsi*、*Njalli*、*Svenni* といった愛称を生成することが可能な一音節の名前が存在する以上、一母語話者の主観的な感想の域を脱してはおらず、十分に納得のいく説明とは言い難い。さらに、同じく脚注 9 にて言及したようにリズムの点から考えて一音節語ではなくむしろ二音節語の方が望ましいとするならば、尚更、なぜ一音節からなる人名で愛称を生成することができないものがあるのか説

明が見つからない。

詳細は今後の調査の結果を俟つことになるが、果たして一音節からなる人名で愛称生成の可否に関して差異が存在するのか否か、あるとすればその背後にある条件や制約はどのようなものか、明らかにしなくてはならない。

6.2.3. -ó で終わる愛称の生成の可否について

既に第 5.2.1.節にて論じた通り、元々の人名の第二音節に母音-ó を有する場合は短縮語形成の一種である ó-orð に倣い、愛称は第二音節に-ó を有する開音節であることが期待される。しかしながら上記の仮説が正しいとするならば、例えば *Ísólfr* や *Halldór* という名前からは *Ísó* や *Halldó* といった愛称が期待されるが、現時点での筆者の資料には確認されていない。今後の調査を通じてこのような愛称が生成可能か否か、仮に不可であるならばその要因は何であるか、明らかにする必要がある。

謝辞

*本稿は、筆者が 2023 年 9 月に行った口頭発表の際の配布資料（三村 2023）に大幅に加筆並びに修正を加えたものである。聴衆諸氏から賜ったコメントや助言は加筆・修正を行う上で大変参考となった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。また、本稿の草稿に貴重なコメントをくださった二名の覆面査読者にも心よりお礼を申し上げる。なお、本稿にて引用した一次資料は全て JSPS 科研費（JP15K16729, JP20K00594, JP24K03858）の助成により実施したフィールドワークを通じて採取したものであることをここに付記する。

参考文献¹⁷

- Alexander Jóhannesson (1927). *Die Suffixe im Isländischen*. 1927. Reykjavík: Árbók Háskóla Íslands.
- Dehé, Nicloe and Wetterlin, Allison (2013). "Secondary stress in morphologically complex words in Faroese: A word game" Ed., Holden Härtl. *Interfaces of Morphology: A Festschrift for Susan Olsen*. Berlin: Akademie Verlag GmbH, pp. 229--248.
- Egill, Anna Steinunn Ingólfssdóttir, Magnús Jochum Pálsson, Zoë Vala Sans, Angelo Deleo and Lála Molenaar (2020). "Nicknames in Icelandic." *Ylhyra*. <https://ylhyra.is/nicknames-in-icelandic> 【2023 年 7 月 23 日閲覧】
- Guðmundur Finnbogason (1926). "Íslensk gælunöfn." *Skírnir* 100, p104-112.
- Guðrún Kvaran (2013). "Íslensk gælunöfn fyrr og nú." Zakaris Svabo Hansen, Jógvan í Lon Jacobsen, Tina K. Jakobsen, Kristin Magnussen and Turið Sigurðardóttir, eds. *Frá Sturlungu til West Venture. Heiðursrit til Anfinn Johansen á 60 ára degnum*. Tórshavn: Fróðskapur, Þórshöfn
- Haraldur Bernharðsson (2008). "Den islandske navnelov." *Språk i Norden 2008 Tema: Namn*, Oslo: Språknämnderna i Norden, p59-73.
- Icelandic Experiment* (2019). "Icelandic Name Phenomena." <https://icelandexperiment.wordpress.com/2019/01/07/icelandic-name-phenomena/> 【2023 年 8 月 4 日閲覧】
- Ito, Junko (1990). "Prosodic minimality in Japanese." *CLS 26-II (The Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology)*. Chicago: Chicago Linguistic Society, University of Chicago, pp. 213--239.
- Jones, Oscar F.(1964). "Icelandic neologisms in -ó." *Word* 20, p77-94.
- Kristján Árnason (2005). "The standard languages and their systems in the 20th century" Eds., Oskar Bandle et al. *The Nordic Languages: An International handbook of the History of the North Germanic Languages*. Volume 2. Berlin/New York: Walter de Gruyter, pp. 1560--1573.

¹⁷ 執筆者がアイスランド人（と思われる）の場合は、（アイスランド人ではない人物との共著の場合を除き）慣例に倣い執筆者名を「ファーストネーム・（ミドルネーム・）ラストネーム」の要領で記す。

- 窪菌晴夫 (1995). 『語形成と音韻構造』. 日英語対照研究シリーズ (3). 東京: くろしお出版.
- Mannanafnaskrá. <https://www.island.is/mannanafn/leit-ad-nafni/> 【2019年3月11日、8月29日閲覧】
- 三村竜之 (2015). 「アイスランド語における副次強勢とリズムに関する一考察」. 『北海道言語文化研究』第13号. pp. 1--14.
- 三村竜之 (2020). 「アイスランド語のアクセント史の構築に向けて」. 日本音韻論学会音韻論フォーラム2020 (2020年8月29日, Zoom オンライン開催).
- 三村竜之 (2021). 「アイスランド語ストレスアクセントの史的研究: 文献資料とフィールドワークに基づく試論」. 『北海道言語文化研究』第19号. pp. 11--94.
- 三村竜之 (2023). 「アイスランド語における人名の愛称にまつわる諸問題」. 北海道言語研究会第25回研究例会 (2023年9月26日, 室蘭工業大学).
- 三村竜之 (2024a). 「アイスランド語における二重母音の音韻解釈: 特に「長さ」の解釈に焦点を当てて」. 『室蘭工業大学紀要』第73号. pp. 19--35.
- 三村達之 (2024b). 「アイスランド語における無声歯茎側面破擦音にまつわる諸問題」. 北海道言語研究会第27回研究例会 (2024年9月27日, 室蘭工業大学)
- Parkvall, Mikael (1998). "O-words: colloquial/slangy words ending in <o>." *Lingust List* 1, mars. Sótt 2. apríl af <https://linguistlist.org/issues/9/9-360.html>. 【2025年2月1日閲覧】
- Reddit (2015). "Icelandic short names / nicknames?" https://www.reddit.com/r/Iceland/comments/47au5g/icelandic_short_names_nicknames/?rdt=59103 【2023年8月1日閲覧】
- Willson, Kendra (2006). "Frásagnir af gælunöfnum." *Vefritið Nefnir* 21. Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum. <https://arnastofnun.is/is/utgafa-og-gagnasofn/pistlar/frasagnir-af-gaelunofnum> 【2023年8月10日閲覧】
- Willson, Kendra (2007). *Icelandic nicknames*. Ph.D. dissertation. University of California, Berkeley.
- Willson, Kendra (2008). "1400 Icelandic nicknames." Guðrún Kvaran, Hallgrímur J. Ámundason, Jónína Hafsteinsdóttir and Svavar Sigmundsson, eds. *Norræn nöfn --- Nöfn á Norðurlöndum. Hefðir og endurnýjun / Nordiska namn --- Namn i Norden. Tradition och förnyelse: Handlingar från den fjortonde nordiska namnforskarkongressen i Borgarnes 11--14 augusti 2007* (Norna-Rapporter 84). Uppsala: Norna-Förlaget. pp. 487--493.

執筆者紹介

氏名: 三村竜之 (みむら・たつゆき)

所属: 室蘭工業大学ひと文化系領域

Email: m76tatsu@gmail.com

付録 1: 調査項目一覧

注記: 表中のアステリスク(*)を付した箇所は、綴りや音声表記等が筆者の中で未だに確証の得られていない項目（確認・追加調査を要する項目）である；また「先行研究ほか」の欄で「÷」を付した箇所はそもそも言及がない（つまりは愛称の報告がない）項目であることを示す。

	筆者の資料				先行研究ほか
1	<i>Aðalheiður</i>	[á:ðal.ɦɛɪ.ðɦʊ]	<i>Heiða</i>	[ɦɛɪ.ða]	Heiða
2	<i>Ágúst</i>	[áʊ.gust]	<i>Gústi</i>	[gús.tɪ]	Gústi
3	<i>Alexander</i>	[á:lek.san.de(:)ɾ]	<i>Aleks?</i>	[á:leks]	÷
4	<i>Alexandra</i>	[á:lek.san.dra]	<i>Aleks</i>	[á:leks]	÷
5	<i>Ari</i>	[á:ri]			÷
6	<i>Anna</i>	[án.na]			÷
7	<i>Alísa</i>	[á:li.sa]	<i>Lísa</i>	[lí.sa]	÷
8	<i>Ármann</i>	[áʊr.man]~[-mànʰ]	<i>Manni</i>	[mánʰ.nɪ]	Manni
9	<i>Arni</i>	[áʊrt.nɪ]			÷
10	<i>Ásgeir</i>	[áʊs.gɛɪɾ]	<i>Geiri</i>	[gɛɪ.ri]	Geiri
11	<i>Ásgrímur</i>	[áʊs.grí: mʊɾ]	<i>Ási</i>	[áʊ.sɪ]	÷
12	<i>Auður</i>	[óɣ.ðɦʊ]	<i>Auja</i>	[óɣ.ja]	÷
13	<i>Benedikt</i>	[bɛ:ne.dɪxt]	<i>Benni</i>	[bénʰ.nɪ]	÷
14	<i>Barbara</i>	[bár.ba.ra]*			÷
15	<i>Bergmann</i>	[bérk.màn(ʰ)]	<i>Beggi</i>	[béɡʰ.ɡɪ]	÷
			<i>Manni</i>	[mán.nɪ]	
16	<i>Bergsteinn</i>	[bérk.stɛɪtʰ]	<i>Steini</i>	[stɛɪ.nɪ]	Beggi
17	<i>Bergsveinn</i>	[bérk.svɛɪtʰ]	<i>Beggi</i>	[béɡʰ.ɡɪ]	÷
			<i>Sveini NG</i>		
18	<i>Bergþór</i>	[bérk.θòʊɾ]	<i>Beggi</i>	[béɡʰ.ɡɪ]	÷
19	<i>Bergþóra</i>	[bérk.θòʊ.ra]	<i>Begga</i>	[béɡʰ.ɡa]	Begga
20	<i>Birna</i>	[bírt.na]	<i>Bidda</i>	[bíðʰ.ða]	÷
21	<i>Björgólfur</i>	[bʲóerk.ɔʊl.ʊɦʊ]	<i>Bjöggi</i>	[bʲóégʰ.ɡɪ]	Bjöggi
22	<i>Björgvin</i>	[bʲóerk.vɪ(:)n]	<i>Bjöggi</i>	[bʲóégʰ.ɡɪ]	Bjöggi
23	<i>Björk</i>	[bʲóerk]			÷
24	<i>Björn</i>	[bʲóertʰ]	<i>Bjössi</i>	[bʲóésʰ.sɪ]	Bjössi
25	<i>Bragi</i>	[braɪ.jɪ]			÷
26	<i>Brynjólfur</i>	[brínʲ.jòʊl.ʊɦʊ]	<i>Binni</i>	[bínʰ.nɪ]	Binni
27	<i>Daníel</i>	[dái.ni.(j)el]	<i>Danni</i>	[dánʰ.nɪ]	Danni
28	<i>Davíð</i>	[dá.við]	<i>Dabbi</i>	[dábʰ.ɸɪ]	Dabbi
29	<i>Egill</i>	[éɪɪtʰ]			÷
30	<i>Einar</i>	[éɪ.nar]	<i>Einsi</i>	[éɪn.sɪ]	Einsi
31	<i>Eiríkur</i>	[éɪ.ri:kʊɾ]	<i>Eiki*</i>	[éɪ.kʰɪ]	÷
32	<i>Elísabet</i>	[é.li.sa.bert]*	<i>Beta</i>	[béɪ.ta]	Beta

33	<i>Erla</i>	[ér.t̪la]*			÷
34	<i>Erlingur</i>	[ér.lɪŋ.ɡʏr̥]	<i>Elli</i>	[él̪.lɪ]	Elli
35	<i>Eyjólfur</i>	[éɪ.jɔ̥ɹ̥l.vʏr̥]	<i>Eyjó</i>	[éɪ.jɔ̥ɹ̥]	Eyjó
36	<i>Eysteinn</i>	[éɪ.stɛɪt̪ⁿ]	<i>Steini</i>	[stéɪ.nɪ]	Steini
37	<i>Finnbogi</i>	[fɪn(·).bðɪ.jɪ]	<i>Finsi</i>	[fɪn(·).sɪ]	÷
			<i>Finni</i>	[fɪn.nɪ]	
38	<i>Finnjón</i>	[fɪn(·).jðɹ̥n]	<i>Finsi</i>	[fɪn(·).sɪ]	÷
39	<i>Freyr</i>	[fr̥éɪr̥]			Freysi
40	<i>Freysteinn</i>	[fr̥éɪ.stɛɪt̪ⁿ]	<i>Steini</i>	[stéɪ.nɪ]	Freysi
41	<i>Freyþór</i>	[fr̥éɪ.θðɹ̥]	<i>Freysi</i>	[fr̥éɪ.sɪ]	÷
42	<i>Friðleifur</i>	[fr̥íð.lɛɪ.vʏr̥]	<i>Leivi</i>	[léɪ.vɪ]	÷
43	<i>Friðrik</i>	[fr̥í(:)ð.rɪ(:)k]	<i>Frikki</i>	[fr̥íʰk̪.kɪ]	Frikki
44	<i>Gabriel</i>	[gáɪ.b̥r̥eɪ̯]			Gabbi
45	<i>Georg</i>	[geóɹ̥ɡ]*	<i>Goggi</i>	[góɹ̥ː.ɡɪ]	Goggi
46	<i>Grímur</i>	[gr̥íː.mʏr̥]			÷
47	<i>Guðbjörg</i>	[ɡʏúð.b̥jœrk]	<i>Gugga</i>	[ɡúɹ̥ː.ɡa]	Gugga
48	<i>Guðjón</i>	[ɡʏúð.jðɹ̥n]	<i>Gau(j)i</i>	[góɹ̥ː.jɪ]	÷
49	<i>Guðlaug</i>	[ɡʏúð.lœɹ̥x]	<i>Gulla</i>	[ɡúl̪.la]	Gugga
			<i>Lauga</i>	[lóɹ̥ː.ɹa]	
50	<i>Guðlaugur</i>	[ɡʏúð.lœɹ̥.ɹʏr̥]	<i>Gulli</i>	[ɡúl̪.lɪ]	Gulli
			<i>Laugi</i>	[lóɹ̥ː.jɪ]	
51	<i>Guðmundur</i>	[ɡʏúð.mʏn.ðʏr̥]	<i>Gummi</i>	[ɡám̪ː.nɪ]	Gummi
			<i>Mummi</i>	[mám̪ː.nɪ]	
			<i>Mundi</i>	[mán̪.ðɪ]	
52	<i>Guðni</i>	[ɡʏúð.nɪ]			÷
53	<i>Guðrún</i>	[ɡʏúð.ru(:)n]	<i>Gunna</i>	[ɡám̪ː.na]	Gugga
			<i>Rúna</i>	[rúː.na]	
54	<i>Gunnar</i>	[ɡám̪ː.nar̥]	<i>Gunni</i>	[ɡám̪ː.nɪ]	Gunni
55	<i>Gústaf</i>	[ɡú(:)s.ta(:)f]	<i>Gústi</i>	[ɡús.tɪ]	Gústi
56	<i>Hafsteinn</i>	[há(:)f.stɛɪt̪ⁿ]	<i>Hatti</i>	[hát̪ː.tɪ]	Haffi
			<i>Steini</i>	[stéɪ.nɪ]	
57	<i>Halla</i>	[hát̪ː.t̪la]			÷
58	<i>Halldór</i>	[hál̪.ðɔ̥ɹ̥]	<i>Dóri</i>	[ðóɹ̥.rɪ]	Dóri
59	<i>Halldóra</i>	[hál̪.ðɔ̥ɹ̥.ra]	<i>Dóra</i>	[ðóɹ̥.ra]	÷
60	<i>Hallgrímur</i>	[hát̪ː.ɡr̥íː.mʏr̥]	<i>Halli</i>	[hál̪.lɪ]	÷
61	<i>Hallur</i>	[hát̪ː.t̪ʏr̥]			÷
62	<i>Hannibal</i>	[hán̪ː.nɪ.baɪ̯]			Bali
63	<i>Haraldur</i>	[háɪː.ral̪.ðʏr̥]	<i>Halli</i>	[hál̪.lɪ]	÷

64	<i>Hekla</i>	[hék.(k)la]			÷
65	<i>Hella</i>	[hét̚.t̚la]			÷
66	<i>Hildimundur</i>	[híl.ði.mʉn.dʉr]	<i>Mundi</i>	[mʉn.ði]	÷
67	<i>Hrafnhildur</i>	[rá(p̚)p̚n.híl.dʉr]	<i>Hrabba</i>	[ráb̚.ʔa]	÷
68	<i>Hrafnkell</i>	[rá(p̚)p̚n.kʰe(:).t̚]	<i>Keli</i>	[kʰé:.lɪ]	Keli Hrabbi
69	<i>Hreinn</i>	[rét̚ⁿ]			÷
70	<i>Höskuldur</i>	[hóes.kʉr.dʉr]	<i>Höski</i>	[hóes.kɪ]	÷
71	<i>Indriði</i>	[ím.dr̥i:.ði]	<i>Indi</i>	[ím.ði]	÷
72	<i>Inga</i>	[ín.ǵa]			÷
73	<i>Ingibjörg</i>	[ín.ǵi.bʲœrk]	<i>Inga</i>	[ín.ǵa]	÷
			<i>Imba</i>	[ím.ʔa]	
74	<i>Ingólfur</i>	[ín.ǵòʋl.vʉr]	<i>Ingó</i>	[ín.ǵòʋ]	÷
75	<i>Ísólfur</i>	[í:.sòʋl.vʉr]			÷
76	<i>Jóhanna</i>	[jóʋ.han̚.na]	<i>Jóa</i>	[jóʋ.(w)a]	÷
			<i>Hanna</i>	[hán̚.na]	
77	<i>Jón</i>	[jóʋn]	<i>Nonni</i>	[nón.nɪ]	Nonni
			<i>Jónsi</i>	[jóʋn.sɪ]	Jónsi
			<i>Jónði</i>	[jóʋn.tɪ]	
78	<i>Jónína</i>	[jóʋ.ni.na]	<i>Nína</i>	[ní:.na]	÷
			<i>Ninna</i>	[nín̚.na]	
79	<i>Karl</i>	[kʰárt̚]	<i>Kalli</i>	[kʰál̚.lɪ]	Kalli
80	<i>Kjartan</i>	[kʰár̚.tan]	<i>Kjarri</i>	[kʰár̚.rɪ]	Kjarri
81	<i>Klara</i>	[klár̚.ra]			÷
82	<i>Kolbeinn</i>	[kʰól̚.beit̚ⁿ]	<i>Kolli</i>	[kʰól̚.lɪ]	Kolli
83	<i>Kolbrún</i>	[kʰól̚.bru:n]	<i>Kolla</i>	[kʰól̚.la]	Kolla Kobba
84	<i>Kolfinna</i>	[kʰól̚.finn̚.na]	<i>Kolla</i>	[kʰól̚.la]	Kolla
85	<i>Kristbjörg</i>	[kr̥íst̚.bʲœrk]	<i>Kidda</i> *	[kʰíd̚.ða]	Krissa
86	<i>Kristinn</i>	[kr̥ís̚.tɪn]	<i>Kiddi</i>	[kʰíd̚.ði]	Kiddi
87	<i>Kristján</i>	[kr̥ís̚.tjaʋn]	<i>Stjáni</i>	[stjáʋ.nɪ]	Stjáni Krissi
88	<i>Kristjana</i>	[kr̥ís̚.tja.na]	<i>Kidda</i> *	[kʰíd̚.ða]	÷
89	<i>Kristleifur</i>	[kr̥íst̚.lei̯.vʉr]	<i>Leivi</i> *	[léi̯.vɪ]	Krissi
90	<i>Kristmundur</i>	[kr̥íst̚.mʉn.dʉr]	<i>Mundi</i>	[mʉn.ði]	Krissi
91	<i>Kristófer</i>	[kr̥ís̚.təʋ.fer]	<i>Kristó</i>	[kr̥ís̚.təʋ]	Krissi
92	<i>Magdalena</i>	[máʋ.ða.le(:).na]	<i>Lena</i>	[lé:.na]	÷
93	<i>Magnús</i>	[mág̊.nu:s]	<i>Maggi</i>	[mág̊.ǵɪ]	Maggi
94	<i>María</i>	[má.ri.ja]*	<i>Maja</i> *	[má.ja]*	Mæja

95	<i>Margrét</i>	[már.ɡrɛ:t]	<i>Magga</i>	[máɡʷ.ɡɑ]	Magga
96	<i>Matthías</i>	[máʰtʷ.ti.ɑ:s]	<i>Matti</i>	[máʰɪ]	Matti
97	<i>Mikael</i>	[mí.kæɛl]*	<i>Mikki</i>	[míʰkʷ.kɪ]	Mikki
98	<i>Mjöll</i>	[mʲœ(t)tʰ]			Mikki
99	<i>Nikulás</i>	[ní.ku.laʊs]	<i>Nikki</i>	[níʰkʷ.kɪ]	Nikki
			<i>Lási</i>	[láʊ.sɪ]	
100	<i>Njáll</i>	[nʲáʊtʰ]	<i>Njalli</i>	[nʲálʷ.lɪ]	÷
101	<i>Ólafur</i>	[óʊ.la.vʊɾ]	<i>Óli</i>	[óʊ.lɪ]	Óli
102	<i>Páll</i>	[pʰáʊtʰ]	<i>Palli</i>	[pʰálʷ.lɪ]	Palli
103	<i>Pétur</i>	[pʰéhɛ.tʊɾ]	<i>Pési</i>	[pʰéhɛ.sɪ]	Pési
104	<i>Ragnar</i>	[rá(ɡ)ɡ.na(:)ɾ]	<i>Raggi</i>	[ráɡʷ.ɡɪ]	Raggi
105	<i>Ragnheiður</i>	[ráɡʷ.hɛɪ.ðʊɾ]	<i>Ragga</i>	[ráɡʷ.ɡɑ]	Ragga
			<i>Heiða</i>	[hɛɪ.ða]	
106	<i>Ragnhildur</i>	[ráɡʷ.hɪl.ðʊɾ]	<i>Ragga</i>	[ráɡʷ.ɡɑ]	Ragga
107	<i>Ríkharður</i>	[rí:k.hɑɾ.ðʊɾ]	<i>Rikki</i>	[ríʰkʷ.kɪ]	Rikki
108	<i>Runólfur</i>	[rá:.nɔʊl.vʊɾ]	<i>Runni</i>	[ránʷ.nɪ]	Runni
109	<i>Sara</i>	[sá:.ra]			÷
110	<i>Sigmundur</i>	[síʏ.mʊn.ðʊɾ]	<i>Simmi</i>	[símʷ.mɪ]	Simmi
			<i>Mundi</i>	[mún.ɗɪ]	
111	<i>Sigríður</i>	[síʏ.rɪ.ðʊɾ]	<i>Sigga</i>	[síɡʷ.ɡɑ]	÷
112	<i>Sigríkur</i>	[síʏ.rɪ.kʊɾ]	<i>Siggi?</i>	[síɡʷ.ɡɪ]	÷
113	<i>Sigurbjörg</i>	[sí:.ʏɐ.bʲœrk]	<i>Sibba</i>	[síbʷ.ɓɑ]	Sibba
114	<i>Sigurbjörn</i>	[sí:.ʏɐ.bʲœrtʰ]	<i>Sibbi</i>	[síbʷ.ɓɪ]	Sibbi
			<i>Bjössi</i>	[bʲœsʷ.sɪ]	
115	<i>Sigurður</i>	[sí:.ʏɐ.ðʊɾ]	<i>Siggi</i>	[síɡʷ.ɡɪ]	Siggi
116	<i>Sigurjón</i>	[sí:.ʏɐ.jɔʊn]	<i>Jonni</i>	[jónʷ.nɪ]	
			<i>Sjonni</i>	[ʃónʷ.nɪ]	Sjónni Grjóni
117	<i>Sigurjóna</i>	[sí(:).ʏɐ.jɔʊ.nɑ]	<i>Jóna</i>	[jɔʊ.nɑ]	÷
118	<i>Sigurkarl</i>	[sí:.ʏɐ.kʰàrtʰ]	<i>Siggi</i>	[síɡʷ.ɡɪ]	÷
			<i>Kalli</i>	[kʰálʷ.lɪ]	
119	<i>Sigurlaug</i>	[sí:.ʏɐ.lœʏx]	<i>Lauga</i>	[lœʏ.ʏɑ]	Lauga
120	<i>Sigurlaugur</i>	[sí:.ʏɐ.lœʏ.ʏʊɾ]	<i>Silli</i>	[sílʷ.lɪ]	÷
			<i>Laugi</i>	[lœʏ.jɪ]	
121	<i>Sigurleifur</i>	[sí:.ʏɐ.lɛɪ.vʊɾ]	<i>Leivi</i>	[léɪ.vɪ]	÷
122	<i>Sólveig</i>	[sóʊl.vɛɪx]	<i>Solla</i>	[sólʷ.lɑ]	Solla
			<i>Veiga</i>	[vɛɪ.ʏɑ]	

123	<i>Stefanía</i>	[sté.fa.ní.a]*	<i>Steffy</i>	[stéʰ.fi]	÷
			<i>Stebba</i>	[stébʰ.ba]	
			<i>Steffa</i> NG		
124	<i>Stefán</i>	[sté(:).faʊn]	<i>Stebbi</i>	[stébʰ.bɪ]	Stebbi
125	<i>Steinunn</i>	[stéɪ.nʊn]	<i>Steina</i>	[stéɪ.na]	Steina
126	<i>Sturlaugur</i>	[stúr.lœʏ.ʏʊr]	<i>Stulli</i>	[stúlʰ.lɪ]	Stulli
			<i>Laugi</i>	[lœʏ.jɪ]	
127	<i>Sveinn</i>	[svéɪtʰ]	<i>Svenni</i>	[svénʰ.nɪ]	Svenni
128	<i>Sverrir</i>	[svérʰ.rɪr]	<i>Sveppi</i>	[svéʰpʰ.pɪ]	÷
129	<i>Sæmundur</i>	[sæɪ.mʊn.ðʊr]	<i>Sæmi</i>	[sæɪ.mɪ]	Sæmi
			<i>Mundi</i>	[mʊn.ðɪ]	
130	<i>Tómas</i>	[tʰóʏ.mas]	<i>Tommi</i>	[tʰómʰ.mɪ]	Tommi
131	<i>Ugla</i>	[úkʰ.kla]*			÷
132	<i>Valdemar</i>	[vál.ðe.ma(:)r]	<i>Valdi</i>	[vál.ðɪ]	Valdi
133	<i>Valgarð</i>	[vál.garð]	<i>Valli</i>	[válʰ.lɪ]	Valli
134	<i>Valgeir</i>	[vál.géɪr]	<i>Valli</i>	[válʰ.lɪ]	Valli
			<i>Geiri</i>	[géɪ.rɪ]	
135	<i>Valtýr</i>	[váltɪr]*			Valli
136	<i>Verónika</i>	[vé.rɔ.ni.kɑ]			÷
137	<i>Vigdís</i>	[víʏ.ðis]	<i>Dísa</i>	[díʰ.sa]	Dísa
138	<i>Vígfús</i>	[víʏ.fu:s]	<i>Fúsi</i>	[fúʰ.sɪ]	Fúsi
139	<i>Víglundur</i>	[víʏ.lʊn.ðʊr]	<i>Viggi</i>	[víʏʰ.gɪ]	Villi
140	<i>Vilhjálmur</i>	[vɪl.ʒaʊl.mʊr]	<i>Villi</i>	[vɪlʰ.lɪ]	Villi
141	<i>Pór</i>	[θóʏr]			÷
142	<i>Póra</i>	[θóʏra]			÷
143	<i>Porgeir</i>	[θóʏr.géɪr]	<i>Geiri</i>	[géɪ.rɪ]	Geiri
144	<i>Pórgrímur</i>	[θóʏr.gríʰ.mʊr]	<i>Grímur?</i>	[gríʰ.mʊr]	÷
145	<i>Porkell</i>	[θóʏkʰ(ʰ)etʰ]	<i>Keli</i>	[kʰéʰ.lɪ]	Keli
146	<i>Pórsteinn</i>	[θóʏr.steɪtʰ]	<i>Steini</i>	[stéɪ.nɪ]	Steini
147	<i>Þorvaldur</i>	[θóʏr.val.ðʊr]	<i>Valdi</i>	[vál.ðɪ]	Valdi
148	<i>Þorveig</i>	[θóʏr.veɪʏ]	<i>Veiga</i>	[véɪ.ʏɑ]	÷
149	<i>Ögmundur</i>	[œʏ.mʊn.ðɪ]	<i>Mundi</i>	[mʊn.ðɪ]	Ömmi

付録 2: 採取された愛称と対応する人名の一覧

	愛称	対応する人名
1	Alex	Alexander, Alexandra
2	Auja	Auður
3	Ási	Ásgrímur
4	Begga	Bergþóra
5	Beggi	Bergmann, Bergsveinn, Bergþór
6	Benni	Benedikt
7	Bergsveinn	Sveinni
8	Beta	Elísabet
9	Bidda	Birna, spelled with two d's
10	Binni	Brynjólfur
11	Bjöggi	Björgólfur, Björgvin
12	Bjössi	Björn, Sigurbjörn
13	Dísa	Vigdís
14	Dóra	Haldóra
15	Dóri	Haldór
16	Dabbi	Davið
17	Danni	Daníel
18	Eiki	Eiríkur
19	Einsi	Einar
20	Elli	Erlingur
21	Eyjó	Eyjólfur
22	Fúsi	Vigfús
23	Finni	Finnbogi
24	Finnsi	Finnbogi, Finnjón
25	Freysi	Freyþór
26	Frikki	Friðrik
27	Gústi	Ágúst, Gústaf
28	Gauji	Guðjón, spelled also Gaui
29	Geiri	Ásgeir, Valgeir, Þorgeir
30	Goggi	Georg
31	Grímur	Þórgrímur
32	Gugga	Guðbjörg
33	Gulla	Guðlaug
34	Gulli	Guðlaugur

35	Gummi	Guðmundur
36	Gunna	Guðrún
37	Gunni	Gunnra
38	Höski	Höskuldur
39	Haddi	Hafsteinn
40	Halli	Haraldur
41	Hanna	Jóhanna
42	Heiða	Aðalheiður, Ragnheiður
43	Hrabba	Hrafnhildur
44	Imba	Ingibjörg
45	Indi	Indriði
46	Ingó	Ingólfur
47	Inga	Ingibjörg
48	Jóa	Jóhanna
49	Jóna	Sigurjóna
50	Jónði	Jón
51	Jónsi	Jón
52	Jonni	Sigurjón
53	Kalli	Karl, Sigurkarl
54	Keli	Hrafnkell, Þorkell
55	Kidda	Kristjana
56	Kiddi	Kristinn
57	Kjarri	Kjartan
58	Kolla	Kolbrún, Kolfínna
59	Kolli	Kolbeinn
60	Kridda	Krstbjörg
61	Krstó	Krstófer
62	Lási	Nikulás
63	Lísa	Alísa
64	Lauga	Guðlaug, Sigurlaug
65	Laugi	Guðlaugur, Sigurlaugur, Sturlaugur
66	Leivi	Friðleifur, Kristleifur, Sigurleifur
67	Lena	Magdalena
68	Magga	Margret
69	Maggi	Magnús
70	Maja	María

71	Manni	Ármann, Bergmann
72	Matti	Matthías
73	Mikki	Mikael, Mjöll
74	Mummi	Guðmundur
75	Mundi	Guðmundur, Hildimundur, Kristimundur, Sigmundur, Sæmundur, Ögmundur
76	Nína	Jónína
77	Nikki	Nikulás
78	Ninna	Jónína
79	Njalli	Njáll
80	Nonni	Jón
81	Óli	Ólafur
82	Palli	Páll
83	Pési	Pétur
84	Rúna	Guðrún
85	Ragga	Ragnheiður, Ragnhildur
86	Raggi	Ragnar
87	Rikki	Ríkharður
88	Runni	Rúnólfur
89	Sæmi	Sæmundur
90	Sibba	Sigurbjörg
91	Sibbi	Sigurbjörn
92	Sigga	Sigríður
93	Siggi	Sigurður, Sigurkur, Sigurkarl
94	Silli	Sigurlaugur
95	Simmi	Sigmundur
96	Sjonni	Sigurjón
97	Solla	Sólveig
98	Stebba	Stefanía
99	Stebbi	Stefán
100	Steffy	Stefanía
101	Steina	Steinunn
102	Steini	Bergsteinn, Hafsteinn
103	Steinni	Eysteinn, Freysteinn, Þórsteinn
104	Stjáni	Kristján

105	Stulli	Sturlaugur
106	Svenni	Sveinn
107	Sveppi	Sverrir
108	Tommi	Tómas
109	Valdi	Valdemar, Þorvaldur
110	Valli	Valgarð, Valgeir
111	Veiga	Sólveig, Þórveig
112	Viggi	Víglundur
113	Villi	Vilhjálmur
